

IBM WebSphere Business Integration



WebSphere Business Integration Adapters のインストール

IBM WebSphere Business Integration



WebSphere Business Integration Adapters のインストール

お願い

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、59 ページの『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本書は、IBM WebSphere Business Integration Adapter Framework (5724-G92)、および新しい版で明記されていない限り、以降のすべてのリリースおよびモディフィケーションに適用されます。

本マニュアルに関するご意見やご感想は、次の URL からお送りください。今後の参考にさせていただきます。

<http://www.ibm.com/jp/manuals/main/mail.html>

なお、日本 IBM 発行のマニュアルはインターネット経由でもご購入いただけます。詳しくは

<http://www.ibm.com/jp/manuals/> の「ご注文について」をご覧ください。

(URL は、変更になる場合があります)

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原 典： IBM WebSphere Business Integration
Installing WebSphere Business Integration Adapters

発 行： 日本アイ・ピー・エム株式会社

担 当： ナショナル・ランゲージ・サポート

第1刷 2005.10

この文書では、平成明朝体™W3、平成明朝体™W7、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、平成角ゴシック体™W5、および平成角ゴシック体™W7を使用しています。この(書体*)は、(財)日本規格協会と使用契約を締結し使用しているものです。フォントとして無断複製することは禁止されています。

注* 平成明朝体™W3、平成明朝体™W7、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、
平成角ゴシック体™W5、平成角ゴシック体™W7

© Copyright International Business Machines Corporation 2003, 2005. All rights reserved.

© Copyright IBM Japan 2005

目次

本書について	v
本書に記載しない内容	v
対象読者	v
関連文書	v
表記上の規則	vi
本リリースの新機能	ix
WebSphere Business Integration Adapters の新機能	ix
WebSphere Business Integration Adapter Framework v2.6 の新機能	ix
WebSphere Business Integration Adapter Framework v2.4 の新機能 (2004 年 6 月 25 日)	x
リリース 2.4 の新機能	x
リリース 2.3.1 の新機能	xi
第 1 章 インストールの概要	1
インストールのロードマップ	1
用語	4
Adapter Framework 2.6 の変更点	6
インストール・プロセス	6
第 2 章 インストール要件	13
ハードウェアおよびソフトウェア要件	13
他のソフトウェアのインストールおよび構成	13
データ・ハンドラー要件	14
第 3 章 WebSphere Business Integration Adapters 製品のインストール	15
インストール・メディアの準備	15
インストール・メディアを使用するための一般的な手順	17
アダプター・フレームワークのインストール	19
データ・ハンドラーのインストール	19
アダプターのインストール	20

WBIA のディレクトリー、ファイル、および環境変数	25
Windows サービスとして実行するアダプターの登録	28

第 4 章 WebSphere Business Integration Adapters 製品のアンインストール	31
グラフィカル・アンインストーラーによる WebSphere Business Integration Adapters のアンインストール	31
サイレント・モードのアンインストールの実行	34

第 5 章 ネットワークを横断するコネクタ・エージェントの分散	37
インストールするコンポーネントについて	37
インストール・タスク	38
セキュリティー	44

第 6 章 WebSphere Business Integration Adapters のアップグレード	45
アダプター開発環境のアップグレード	45
WebSphere Business Information アダプターのアップグレード	45
カスタム・アダプターのアップグレード	47

第 7 章 インストーラーのトラブルシューティングのエラー・メッセージ	49
エラーへの対処	49

索引	57
---------------------	-----------

特記事項	59
プログラミング・インターフェース情報	61
商標	61

本書について

IBM^(R) WebSphere^(R) Business Integration Adapter ポートフォリオは、主要な e-business テクノロジーやエンタープライズ・アプリケーション向けに統合コネクティビティーを提供します。システムには、ビジネス・プロセスの統合用コンポーネントをカスタマイズ、作成、および管理するための IBM WebSphere Business Integration Toolset とテンプレートが組み込まれています。

本書では、Windows[®] 環境、Solaris 環境、AIX[®] 環境、Linux 環境および HP-UX 環境で IBM WebSphere Business Integration Adapters をインストールする方法を説明します。

注: この文書では、2005 年 9 月にリリースされる WebSphere Business Integration Adapters と同時にリリースされるアダプターおよびアダプター・コンポーネントのインストール方法について説明します。2005 年 9 月以前にリリースされたアダプターを使用している場合は、このマニュアルの説明とは異なるインストール手順を使用します。**インストールするアダプターに対応する「WebSphere Business Integration Adapters インストール・ガイド」のバージョンを必ず参照してください。**

注: UNIX[®] コンピューターにアダプターをインストールする場合でも、ツールを実行するために Windows コンピューターが 1 台必要です。

本書に記載しない内容

本書では、サーバーのロード・バランシング、アダプター処理スレッド数、最大および最小スループット、許容度しきい値などの、デプロイメントのメトリックおよびキャパシティー・プランニングの問題については説明していません。

このような問題は、お客様ごとに固有であり、アダプターがデプロイされる環境と正確に同じ環境またはそれに近い環境で評価する必要があります。使用する配置サイトの構成についての質問や、特定の構成を前提とした、この種のメトリックの計画と評価の詳細については、IBM サービス技術員にお問い合わせください。

対象読者

本書は、WebSphere Business Integration Adapters を計画、インストール、配置、管理するコンサルタント、開発者、およびシステム管理者を対象としています。

関連文書

以下のサイトから資料をインストールするか、オンラインで直接閲覧することができます。

- 一般のアダプター情報について、WebSphere Message Broker (WebSphere MQ Integrator)、WebSphere MQ Integrator Broker、WebSphere Business Integration

Message Broker) を搭載したアダプターを使用する場合、および WebSphere Application Server を搭載したアダプターを使用する場合は、次のサイトを参照してください。

<http://www.ibm.com/websphere/integration/wbiadapters/infocenter>

- WebSphere InterChange Server を搭載したアダプターを使用する場合は、次のサイトを参照してください。

<http://www.ibm.com/websphere/integration/wicsserver/infocenter>

上記のサイトには資料のダウンロード、インストール、および表示に関する簡単な説明が記載されています。

注: このインストール・ガイドで説明されている製品の重要な情報は、この文書が公表された後に発行されるテクニカル・サポートの「Technotes」セクションと「Flashes」セクションでも参照可能です。これらの情報は、WebSphere Business Integration Support Web サイト

(<http://www.ibm.com/software/integration/websphere/support/>) にあります。

関心のあるコンポーネント・エリアを選択し、「Technotes」セクションと「Flashes」セクションを参照してください。

表記上の規則

本書では、以下のような規則を使用しています。

注: 本書では、ディレクトリー・パスの規則として円記号 (¥) を使用します。UNIX システムの場合には、円記号をスラッシュ (/) に置き換えてください。すべてのパス名は、製品がインストールされているシステム上のディレクトリーを基準とした相対パス名です。

Courier フォント	コマンド名、ファイル名、入力情報、システムが画面に出力した情報などのリテラル値を示します。
イタリック、イタリック 青い文字	初出語、変数名、または相互参照を示します。 オンラインで表示したときのみ見られる青のアウトラインは、相互参照用のハイパーリンクです。アウトラインの内側をクリックすると、参照先オブジェクトにジャンプします。
{ }	構文の記述行の場合、中括弧 {} で囲まれた部分は、選択対象のオプションです。1 つのオプションのみを選択する必要があります。
	構文の記述行の場合、パイプで区切られた部分は、選択対象のオプションです。1 つのオプションだけを選択する必要があります。
[]	構文の記述行の場合、大括弧 [] で囲まれた部分は、オプション・パラメーターです。
...	構文の記述行の場合、省略符号 ... は直前のパラメーターが繰り返されることを示します。例えば、option[,...] は、複数のオプションをコンマで区切って指定できることを意味します。

< >	1 つの名前の個々のエレメントを互いに区別するために、不等号括弧によって個々のエレメントが囲まれます。例えば、<server_name><connector_name>tmp.log のように使用します。
/, ¥	本書では、ディレクトリー・パスの規則として円記号 (¥) を使用します。UNIX システムの場合には、円記号をスラッシュ (/) に置き換えてください。すべての製品パス名は、Ariba Buyer のコネクタがインストールされているディレクトリーを基準とした相対パス名です。
%text% および \$text	% 記号で囲まれたテキストは、Windows text システム変数またはユーザー変数の値を示します。UNIX 環境でこれに相当する表記は \$text となります。これは、UNIX 環境変数 text の値を示しています。
<i>ProductDir</i>	製品のインストール先ディレクトリーを表します。

本リリースの新機能

WebSphere Business Integration Adapters の新機能

本リリースでの変更点は、次のとおりです。

- 2.6.0.3 アダプター・フレームワークのアップグレードは、フィックスパックとして提供されており、このリリースとは別にインストールされます。詳しくは、「*Installing Adapter Framework Fix Pack 2.6.0.3*」技術情報を参照してください。フィックスパックを入手するには、フィックスパック・ダウンロード・サイトにアクセスしてください。
- 本書には、アダプター・フレームワーク、データ・ハンドラー、または開発ソフトウェアのインストール方法の説明が記載されなくなりました。
- ハードウェアおよびソフトウェア要件は、本書に記載されなくなりました。この情報は、技術文書で提供されます。この技術文書へのリンクについては、13 ページの『ハードウェアおよびソフトウェア要件』を参照してください。

WebSphere Business Integration Adapter Framework v2.6 の新機能

本リリースでの変更点は、次のとおりです。

- 以前のリリースのアダプター・フレームワークとは異なり、Adapter Framework 2.6 ソフトウェアは ICS とは別に提供され、インストールされます。これにより、アダプター・フレームワークと ICS の両方で、機能拡張の柔軟性を高めることが可能になります。また、アダプター・フレームワークを、ブローカー機能拡張のみによって指示されるリリースから分離し、その逆にも分離します。従って、新規インストール、アップグレード、およびマイグレーションには、いくつものシナリオがあります。インストールおよびアップグレードのシナリオについては、1 ページの『第 1 章 インストールの概要』で説明されています。以前のリリースから新規アダプター・フレームワークへのアダプターのマイグレーションについては、「*Migrating Adapters to Adapter Framework, Version 2.6*」を参照してください。
- Adapter Framework 2.6 は、Java™ Runtime Environment (JRE) 1.4.2 を使用します。すべてのサポートされるプラットフォーム用の IBM JDK 1.4.2 が、このリリースの別の CD で提供されています。
- アダプター・フレームワーク・インストーラーは、統合ブローカー選択ウィンドウを特色とするようになりました。
- アダプター・フレームワークは以下をサポートするようになりました。
 - SuSE Linux Enterprise Server 8.1、Service Pack 3
 - SuSE Linux Standard Server 8.1、Service Pack 3
 - Red Hat Enterprise Linux 3.0 アップデート 1:
 - RHEL 3.0 ES
 - RHEL 3.0 AS
 - RHEL 3.0 WS

- Windows 2003
- アダプター・フレームワークは WASDIE 5.1 および 5.1.1 をサポートします。
- Windows プラットフォームのみで、アダプター・フレームワーク・インストーラーでは、WebSphere Business Integration Toolset またはアダプター・フレームワーク、あるいはその両方のインストールを選択できます。ブローカーとして ICS を選択した場合、インストーラーが ICS がインストールされていることを検出した場合、またはオペレーティング・システムが Windows 2003 である場合、ツール・セット・コンポーネントをインストールできません。
- アダプター・フレームワーク・インストーラーは、以下の新しい環境変数 (Windows) およびシェル・スクリプト変数 (UNIX) を設定します。
 - ARMJAR。IBM Tivoli[®] Monitoring for Transaction Performance をサポートするものです。
 - WAS_CLIENT_HOME。WebSphere Application Server 統合ブローカーをサポートするものです。
- 文書には、すべてのインストール・エラー・メッセージについて説明するトラブルシューティングの章が新規に追加されています。

WebSphere Business Integration Adapter Framework v2.4 の新機能 (2004 年 6 月 25 日)

本リリースでの変更点は、次のとおりです。

- 新しくインストールされたファイル構造
- アダプターがサポートしており、ブローカーとして Interchange Server が稼働している場合、各アダプターのインストーラーがアダプターを Windows サービスとして登録するオプションを提供
- 新規アダプターの文書インストール
- 新規インストール・バッチ・ファイル (Windows) およびシェル・スクリプト・ファイル (UNIX)

リリース 2.4 の新機能

本リリースでの変更点は、次のとおりです。

- 各 WebSphere Business Integration Adapter 製品に、専用のインストーラーが用意されました。各インストーラーの使用については、15 ページの『第 3 章 WebSphere Business Integration Adapters 製品のインストール』を参照してください。
- 本書の 1 ページの『第 1 章 インストールの概要』では、さまざまなタイプの WebSphere Business Integration Adapter 環境を作成するための手順について説明します。
- 本書の 13 ページの『第 2 章 インストール要件』では、ハードウェア前提条件およびソフトウェア前提条件について説明します。
- 本書の 37 ページの『第 5 章 ネットワークを横断するコネクタ・エージェントの分散』では、WebSphere MQ Internet Pass-Thru の使用により、アダプターを遠隔通信で使用可能にする方法について説明します。

- 本書の 45 ページの『第 6 章 WebSphere Business Integration Adapters のアップグレード』では、アダプターの開発環境、カスタム開発されたアダプターの実行環境、および WebSphere Business Integration Adapters 製品の一部であるアダプターの実行環境をアップグレードする方法について説明します。
- WebSphere Business Integration Adapter のアンインストール・プロセスが変更されました。WebSphere Business Integration Adapter のアンインストール方法について詳しくは、31 ページの『第 4 章 WebSphere Business Integration Adapters 製品のアンインストール』を参照してください。
- IBM Java Development Kit が Windows プラットフォーム用の Adapter Framework に同梱されました。IBM JDK のインストール方法について詳しくは、14 ページの『IBM Java Development Kit のインストール』を参照してください。
- VisiBroker オブジェクト・リクエスト・ブローカーが IBM Java オブジェクト・リクエスト・ブローカーに置き換わりました。
- このリリースでは、アダプター・スクリプトが変更されました。既存のスクリプトへの適用を必要とする変更点について詳しくは、リリース情報を参照してください。

リリース 2.3.1 の新機能

本書は、WBIA バージョン 2.3.1 で新規に作成されました。

第 1 章 インストールの概要

本書では、Adapter Framework 2.6 または 2.6.0.3 で稼動する WebSphere Business Integration Adapters のインストール方法をステップごとに説明します。また、アダプターのアップグレード方法およびアンインストール方法についても説明します。

本章の内容は、次のとおりです。

- 『インストールのロードマップ』
- 4 ページの『用語』
- 6 ページの『Adapter Framework 2.6 の変更点』
- 6 ページの『インストール・プロセス』

インストールのロードマップ

本書では、以下のアダプターのインストール方法について説明しています。

- WebSphere Business Integration Adapter for e-Mail、V. 5.5
- WebSphere Business Integration Adapter for EJB、V. 1.2
- WebSphere Business Integration Adapter for iSeries、V. 2.1
- WebSphere Business Integration Adapter for JMS、V. 2.8
- WebSphere Business Integration Adapter for HTTP、V. 1.3
- WebSphere Business Integration Adapter for Portal Infranet、V. 4.4
- WebSphere Business Integration Adapter for CORBA、V. 1.3
- WebSphere Business Integration Adapter for WebSphere Message Broker、V. 2.8
- WebSphere Business Integration Adapter for WebSphere MQ、V. 2.8
- WebSphere Business Integration Adapter for WebSphere MQ Workflow、V. 2.8

さまざまなインストールのシナリオがあります。ご使用の環境の構成、および統合ブローカーの種類とロケーションによって異なります。上位レベルのインストール作業は、以下のとおりです。

1. WebSphere Business Integration Adapter 環境の判別

- 環境が、ローカル、分散、リモート、または開発のいずれであるかを識別します。これらの環境の定義については、4 ページの『用語』を参照してください。
- ハードウェアおよびソフトウェア要件を見直します。詳細については、13 ページの『第 2 章 インストール要件』を参照してください。
- インストール済みの、以前にリリースされた WebSphere Business Integration 構成については、以下を実行します。
 - インストール済みアダプター・フレームワークのバージョン (存在する場合) を特定し、インストールされているマシンを見つけます。
 - 以前のアダプター・フレームワークと共に稼動する特定のアダプター (存在する場合) を特定し、各アダプターのバージョンを書き留めます。

- 統合ブローカー (存在する場合) とそのバージョンを特定し、ブローカーがインストールされているマシンとブローカーのディレクトリー・パスを書き留めます。
 - 下記の表 1 の最初の欄から、ご使用のインストール構成を見つけます。
2. **Adapter Framework 2.6 およびアダプターのインストールおよびフィックスパック 2.6.0.3 の適用** 構成および環境要件を反映した具体的な手順については、表 1 のリンクをたどってください。
 3. **アダプターのマイグレーション** 新規フレームワークへのアダプターのマイグレーション方法を参照するには、表 1 のリンクをたどってください。アダプターのマイグレーションの際には、アダプターおよび ODA 始動スクリプトを変更します。詳細については、「*Migrating Adapters to Adapter Framework, Version 2.6*」ガイドを参照してください。

表 1 では、さまざまな WebSphere Business Integration 環境に適用されるインストールのシナリオをまとめています。表の各行の最後には、手続きを完了するためのステップごとの手順を含む資料へのポインターがあります。

表 1. *WebSphere Business Integration Adapters* のインストールのタスク・ロードマップ

WebSphere Business Integration アダプター		
構成	関連インストール手順 (...を参照)	詳細については、(...を参照)
新規インストール: WebSphere Business Integration Adapter Framework もアダプター成果物もない	注: 統合ブローカーとして ICS 4.3 をインストールする場合、Adapter Framework 2.6 およびフィックスパック 2.6.0.3 を別のディレクトリーにインストールする必要があります。	6 ページの『インストール・プロセス』を参照してください。
Adapter Framework 2.4 および ICS 4.3 ブローカー	1. Adapter Framework 2.4 をアンインストールしてから、Adapter Framework 2.6 をインストールして Adapter Framework フィックスパック 2.6.0.3 を適用します。あるいは、Adapter Framework 2.6 をインストールし、Adapter Framework 2.6.0.3 を適用し、データ・ハンドラーをインストールし、アダプターをインストールし、オプションで別のマシンに ADK をインストールします。 2. オプションでアダプターをマイグレーションします。	1. 6 ページの『インストール・プロセス』および「 <i>Installing Adapter Framework Fix Pack 2.6.0.3</i> 」技術情報を参照してください。 2. 「 <i>Migrating Adapters to Adapter Framework, Version 2.6</i> 」ガイドを参照してください。

表 1. WebSphere Business Integration Adapters のインストールのタスク・ロードマップ (続き)

**WebSphere Business
Integration アダプタ**

一構成	関連インストール手順 (...を参照)	詳細については、(...を参照)
Adapter Framework 2.4 および ICS 4.2.2 ブローカー	<p>1. Adapter Framework 2.4 をアンインストールしてから、Adapter Framework 2.6 をインストールして Adapter Framework フィックスパック 2.6.0.3 を適用します。あるいは、Adapter Framework 2.6 をインストールし、Adapter Framework 2.6.0.3 を適用し、データ・ハンドラーをインストールし、アダプターをインストールし、オプションで別のマシンに ADK をインストールします。</p> <p>注: ICS 4.2.2 と共に Adapter Framework 2.6 を実行している場合、Adapter Framework 2.6 の特定の ICS 4.3 機能は使用不可になります。</p> <p>2. オプションでアダプターをマイグレーションします。</p>	<p>1. 6 ページの『インストール・プロセス』および「<i>Installing Adapter Framework Fix Pack 2.6.0.3</i>」技術情報を参照してください。</p> <p>2. 「<i>Migrating Adapters to Adapter Framework, Version 2.6</i>」ガイドを参照してください。</p>
Adapter Framework 2.4 および WBI MB または WAS ブローカー	<p>1. Adapter Framework 2.4 をアンインストールしてから、Adapter Framework 2.6 をインストールして Adapter Framework フィックスパック 2.6.0.3 を適用します。あるいは、Adapter Framework 2.6 をインストールし、Adapter Framework 2.6.0.3 を適用し、データ・ハンドラーをインストールし、アダプターをインストールし、オプションで別のマシンに ADK をインストールします。</p> <p>2. オプションでアダプターをマイグレーションします。</p>	<p>1. 6 ページの『インストール・プロセス』および「<i>Installing Adapter Framework Fix Pack 2.6.0.3</i>」技術情報を参照してください。</p> <p>2. 「<i>Migrating Adapters to Adapter Framework, Version 2.6</i>」ガイドを参照してください。</p>

表 1. WebSphere Business Integration Adapters のインストールのタスク・ロードマップ (続き)

WebSphere Business Integration アダプター		
一構成	関連インストール手順 (...を参照)	詳細については、(...を参照)
Adapter Framework 2.3 以前	<p>1. 以前のアダプター・フレームワークをアンインストールし、次にデータ・ハンドラー、Adapter Framework 2.6 (その後 Adapter Framework フィックスパック 2.6.0.3 を適用)、アダプター、およびオプションで ADK をインストールします。</p> <p>2. 必要に応じてアダプターをマイグレーションします (最新のアダプター・バージョンが Adapter Framework 2.4 と共に実行される場合、マイグレーションが必要で す)。</p>	<p>1. 6 ページの『インストール・プロセス』、および「Installing Adapter Framework Fix Pack 2.6.0.3」技術情報を参照してから、45 ページの『第 6 章 WebSphere Business Integration Adapters のアップグレード』を参照してください。</p> <p>2. 「Migrating Adapters to Adapter Framework, Version 2.6」ガイドを参照してください。</p>

用語

アダプター・フレームワークを理解するには、以下の用語を理解していなければなりません。

アダプター

統合ブローカーと、アプリケーションまたはテクノロジーとの間の通信をサポートするコンポーネントを提供する、WebSphere ビジネス・インテグレーション・システム内のコンポーネント。アダプターには、常に、コネクタ、メッセージ・ファイル、および Connector Configurator Tool が含まれています。Object Discovery Agent (ODA) が組み込まれる場合もあります。一部のアダプターは、データ・ハンドラーも必要とします。

アダプター環境

以下の 4 つのアダプター環境があります。

- ローカル・アダプター環境** アダプターは、統合ブローカーがインストールされ実行されているコンピューターと同じコンピューターにインストールされます。
- 分散アダプター環境** アダプターは、統合ブローカーがインストールされているコンピューターとは異なるコンピューターにインストールされます。
- リモート・アダプター環境** アダプターは、インターネットを介して統合ブローカーと通信するように、インストールおよび構成されます。
- アダプター開発環境** Adapter Framework、Adapter Development Kit、および関連ツールが、オプションで、ローカル、分散、またはリモート・アダプター環境にインストールされます。

アダプター・フレームワーク

アダプターの構成および実行のために IBM が提供するソフトウェア。アダプター・フレームワークのランタイム・コンポーネントには、Java ランタ

イム環境、コネクタ・フレームワーク、および Object Discovery Agent (ODA) ランタイムが含まれます。このコネクタ・フレームワークには、新規コネクタの開発に必要なコネクタ・ライブラリー (C++ および Java) が含まれています。ODA ランタイムには、新規 ODA の開発に必要な Object Development Kit (ODK) 内のライブラリーが含まれています。構成コンポーネントには、以下のツールが含まれます。

- Business Object Designer
- Connector Configurator
- Log Viewer
- System Manager
- Adapter Monitor
- Test Connector
- (オプション) アダプターに関連付けられた Object Discovery Agent (ODA)

アダプター・フレームワーク・フィックスパック

既存のアダプター・フレームワークへのアップグレード。Adapter Framework フィックスパック 2.6.0.3 は、2.6 フレームワークを更新します。フィックスパックの適用が推奨されており、必須となる可能性があります。詳細については、「*Installing Adapter Framework Fix Pack 2.6.0.3*」技術情報を参照してください。フィックスパックをダウンロードするには、フィックスパック・ダウンロード・サイトにアクセスしてください。

Adapter Development Kit (ADK)

アダプター開発のいくつかのサンプルを提供する開発キット。サンプル・コネクタおよび Object Discovery Agent (ODA) が含まれます。

BiDi テキスト方位が左から右または右から左である言語を指す、「双方向 (bidirectional)」の省略語。

統合ブローカー

異機種のアプリケーション間でデータを統合する、WebSphere ビジネス・インテグレーション・システム内のコンポーネント。統合ブローカーは通常、データのルーティング機能、統合プロセスを管理するルールのリポジトリ、さまざまなアプリケーションへの接続、および統合を容易にする管理機能など、さまざまなサービスを提供します。統合ブローカーの例としては、WebSphere Business Integration Message Broker、WebSphere Business InterChange Server、WebSphere Application Server があります。

WebSphere ビジネス・インテグレーション・システム

多様なソース間で情報を移動してビジネス関連の情報を交換し、エンタープライズ環境内の異種アプリケーション間で情報の処理とルーティングを行う、エンタープライズ・ソリューション。ビジネス・インテグレーション・システムは、統合ブローカーと 1 つ以上のアダプターで構成されています。

WebSphere Integration Message Broker バージョン 2.1

WebSphere MQ キュー間でメッセージの変換およびルーティングを行うメッセージ・ブローカー製品。このテクノロジーを使用すると、アプリケーションがキューとの間でメッセージを送受信することによって、非同期に通信

することができます。キューはリモートであってもかまいません。
WebSphere Integration Message Broker の重要な変更点は、ユーザー定義ロジックに基づいてメッセージのフォーマット設定、保管、およびルーティングを行う機能を追加するメッセージ・フローが追加されたことです。

Adapter Framework 2.6 の変更点

2.6 リリースから、Adapter Framework ソフトウェアは ICS から独立してインストールされます。これにより、アダプター・フレームワークと ICS の両方で、機能拡張の柔軟性を高めることが可能になります。また、アダプター・フレームワークを、ブローカー機能拡張のみによって指示されるリリースから分離し、その逆にも分離します。2.6 フレームワークの詳細について、またはインストール方法については、「*Installing WebSphere Business Integration Adapters, V. 2.6*」を参照してください。

Adapter Framework フィックスパック 2.6.0.3

このフィックスパックは、さまざまな機能拡張、フィックス、およびファイル補足によって、2.6 フレームワークを更新します。これについては、「*Installing Adapter Framework Fix Pack 2.6.0.3*」技術情報を参照してください。

本書で説明する WebSphere Business Integration Adapters インストーラーは、2.6.0.3 アップグレードを 2.6 フレームワークに適用しません。インストールするアダプターのすべての機能をフルに活用するには、2.6.0.3 フレームワーク・フィックスパックを適用することを強くお勧めします。このフィックスパックを入手するには、フィックスパック・ダウンロード・サイトにアクセスしてください。

インストール・プロセス

このセクションでは、作成が必要となる可能性がある、さまざまな種類の WebSphere Business Integration Adapters 環境について説明します。また、環境を作成するためのワークフローについても説明します。

7 ページの図 1 に、WebSphere Business Integration Adapter 環境の種類を示します。

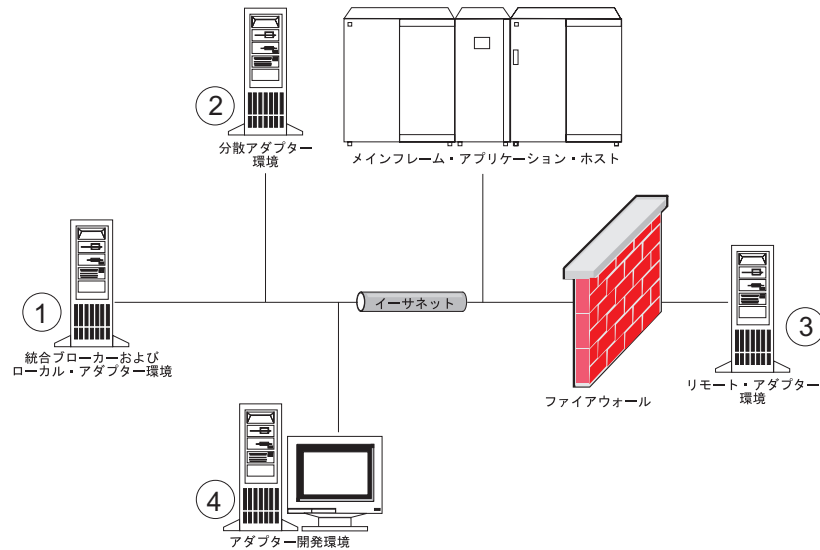


図 1. WebSphere Business Integration Adapter 環境

ローカル・アダプター環境

アダプターは、通常、統合ブローカーがインストールされ、実行されているコンピューターと同じコンピューターにインストールします。ビジネス・インテグレーション・システム内のコンポーネントはすべて単一コンピューターにインストールされているため、このタイプの環境は保守および管理が最も簡単です。特に、インターフェースの開発およびテストを行う場合は、簡単に保守および管理できます。図 1 の環境 1 は、このタイプの環境を表したものです。

ローカル・アダプター環境を作成するには、以下の手順を実行します。

1. ハードウェア要件を満たすコンピューターを必要な環境ごとに 1 台ずつ用意します。

ハードウェア要件については、13 ページの『ハードウェアおよびソフトウェア要件』を参照してください。

2. 使用する統合ブローカーが、WebSphere Business Integration Message Broker または WebSphere Application Server の場合は、WebSphere MQ 資料の説明に従って、WebSphere MQ クライアントをインストールします。サポートされる WebSphere MQ クライアントのバージョンは、ハードウェアおよびソフトウェア要件を説明する技術文書にリストされています。詳細については、13 ページの『ハードウェアおよびソフトウェア要件』を参照してください。
3. インプリメントする統合ブローカーに応じて、以下のいずれかを実行します。
 - 統合ブローカーが WebSphere InterChange Server である場合は、以下の手順を実行します。
 - a. 「システム・インストール・ガイド (Windows 版)」または「システム・インストール・ガイド (UNIX 版)」の説明に従って、WebSphere InterChange Server とその前提ソフトウェアすべてをインストールします。
 - b. Adapter Framework 2.6 を、ICS を含むディレクトリーとは異なるディレクトリーにインストールします。詳細については、「Installing WebSphere

Business Integration Adapters, V. 2.6」を参照してください。Adapter Framework フィックスパック 2.6.0.3 も適用することを強くお勧めします。

注: WebSphere InterChange Server を統合ブローカーとして使用する場合、および WebSphere Business Integration Adapter のインストール先を InterChange Server のインストール先と同じコンピューターにする場合は、別のディレクトリーに Adapter Framework をインストールする必要があります。バージョン 2.6 および 2.6.0.3 では、アダプター・フレームワークは WebSphere InterChange Server と一緒にインストールされなくなりました。

- 統合ブローカーが、サポートされているメッセージング・ブローカーのいずれか、または WebSphere Application Server である場合は、「*Installing WebSphere Business Integration Adapters, V. 2.6*」の説明に従って、Adapter Framework をインストールし、次に 2.6.0.3 フィックスパックをインストールします。
- 4. この環境にインストールする予定の各アダプターについて、それぞれのガイドの構成に関する章を読み、この環境に必要なデータ・ハンドラー要件を判断します。
- 5. 「*Installing WebSphere Business Integration Adapters, V. 2.6*」の説明に従って、この環境に必要な各データ・ハンドラーをインストールします。
- 6. 20 ページの『アダプターのインストール』の説明に従って、この環境に必要な各アダプターをインストールします。
- 7. この環境に必要な各アダプターのガイドの説明に従って、アダプター・ホスト・コンピューターへのアプリケーション・クライアントのインストールなど、アダプター固有のインストール・ステップを実行します。
- 8. 以前のフレームワークと共にリリースされたアダプターを実行したい場合は、「*Migrating Adapters to Adapter Framework, Version 2.6*」ガイドを参照してください。

分散アダプター環境

ほとんどの場合、統合ブローカーがホストされているコンピューターと同じコンピューターにアダプターをインストールしますが、アダプターの分散が必要となる場合もあります。アダプターの分散とは、ブローカーがインストールされているコンピューター以外のコンピューターにアダプターをインストールすることです。

コネクター・エージェントを分散する理由のいくつかを以下に示します。

- ブローカーがホストされているコンピューターを、アダプターに関連する負荷から解放することにより、ビジネス・インテグレーション・システムのパフォーマンスを改善できるため。
- アプリケーションがホストされているコンピューターに、ネットワーク上で隣接するコンピューター上のアダプターをインストールすることにより、アダプターのパフォーマンスを改善できるため。
- ブローカーがホストされているコンピューターのオペレーティング・システムで、アダプターのバージョンを入手できるとは限らないため。

- ICS および以前のバージョンのアダプター・フレームワークがインストールされているマシンとは別のマシンに、Adapter Framework 2.6 をインストールし、Adapter Framework フィックスパック 2.6.0.3 を適用する必要がある場合があります。

7 ページの図 1 の環境 2 は、このタイプの環境を表したものです。この環境では、アダプターがメインフレーム・アプリケーションと通信するために分散されています。

企業ネットワーク内で分散アダプター環境を作成するには、以下の手順を実行します。

1. ハードウェア要件を満たすコンピューターを必要な環境ごとに 1 台ずつ用意します。

ハードウェア要件については、13 ページの『ハードウェアおよびソフトウェア要件』を参照してください。

2. WebSphere MQ 資料の説明に従って、WebSphere MQ クライアントをインストールします。Java Messaging 機能がインストールされていることを確認してください。サポートされる WebSphere MQ クライアントのバージョンは、ハードウェアおよびソフトウェア要件を説明する技術文書にリストされています。詳細については、13 ページの『ハードウェアおよびソフトウェア要件』を参照してください。
3. 使用する統合ブローカーに応じて、以下の手順を実行します。
 - 統合ブローカーが WebSphere Application Server、またはサポートされているメッセージング・ブローカーのいずれかである場合は、以下の手順を実行します。
 - a. 「*Installing WebSphere Business Integration Adapters, V. 2.6*」の説明に従って、Adapter Framework をインストールします。次に、「*Installing Adapter Framework Fix Pack 2.6.0.3*」技術情報の説明に従って、Adapter Framework フィックスパック 2.6.0.3 を適用します。
 - b. この環境にインストールする予定の各アダプターについて、それぞれのガイドの『コネクターのインストールおよび構成 (Installing and configuring the connector)』という見出しの章を読み、この環境に必要なデータ・ハンドラー要件を判断します。
 - c. 「*Installing WebSphere Business Integration Adapters, V. 2.6*」の説明に従って、この環境に必要な各データ・ハンドラーをインストールします。
 - d. 20 ページの『アダプターのインストール』の説明に従って、この環境に必要な各アダプターをインストールします。
 - 統合ブローカーが WebSphere InterChange Server である場合は、以下の手順を実行します。
 - a. 分散コンピューター上で Adapter Framework インストーラーを実行し、そこにアダプター・フレームワークをインストールします。詳細については、「*Installing WebSphere Business Integration Adapters, V. 2.6*」を参照してください。次に、「*Installing Adapter Framework Fix Pack 2.6.0.3*」技術情報の説明に従って、Adapter Framework フィックスパック 2.6.0.3 を適用します。

InterChange Server 構成ウィザードが表示されたら、InterChange Server をブローカー・ホスト・コンピューターにインストールしたときと同じ構成値を指定します。

- b. 20 ページの『アダプターのインストール』の説明に従って、分散コンピューターにアダプターをインストールします。

「IBM WebSphere InterChange Server」画面で、ブローカー・ホスト・コンピューター上の InterChange Server インスタンスの名前を指定します。

- c. repository ディレクトリーで作成されたコネクタ定義を、「*WebSphere Interchange Server システム・インプリメンテーション・ガイド*」の説明に従って、ご使用の開発環境にインポートします。
 - d. アダプターのガイドの説明に従って、コネクタを構成します。
 - e. 「*WebSphere Interchange Server システム・インプリメンテーション・ガイド*」の説明に従って、コネクタを InterChange Server リポジトリーに配置します。
4. ブローカーと通信する環境を構成するには、以下の手順を実行します。
 - a. `ProductDir\bin` ディレクトリーに配置された共用環境ファイルをテキスト・エディターで開きます。

Windows コンピューターの場合、共用環境ファイルのファイル名は `CWSharedEnv.bat` です。

UNIX コンピューターの場合、共用環境ファイルのファイル名は `adapterEnv.sh` または `CWSharedEnv.sh` です。使用するブローカーおよびリリースのバージョンによって異なります。

- b. `ORB_PORT` プロパティーの値を通信で使用するポートに設定します。このポートには、ブローカー・コンピューターにインストールされたオブジェクト・リクエスト・ブローカーが通信用に構成されています。
 - c. `ORB_HOST` プロパティーの値を、ブローカーがインストールされているコンピューターの IP アドレスに設定します。
5. この環境に必要な各アダプターのガイドの説明に従って、アダプター・ホスト・コンピューターへのアプリケーション・クライアントのインストールなど、アダプター固有のインストール・ステップを実行します。

リモート・アダプター環境

アダプターが、複数のネットワーク境界にまたがって、統合ブローカーとデータを交換できるようにするには、リモート・アダプター環境を作成する必要があります。これは、会社が取引先とのビジネス・データの交換を必要とする場合に共通します。

7 ページの図 1 の環境 3 は、このタイプの環境を表したものです。この環境では、アダプターがインターネットを介してブローカーと通信できるようになっています。

リモート・アダプター環境を作成するには、以下の手順を実行します。

1. ハードウェア要件を満たすコンピューターを必要な環境ごとに 1 台ずつ用意します。

ハードウェア要件について詳しくは、13 ページの『ハードウェアおよびソフトウェア要件』を参照してください。

2. WebSphere MQ 資料の説明に従って、WebSphere MQ クライアントをインストールします。Java Messaging 機能がインストールされていることを確認してください。サポートされる WebSphere MQ クライアントのバージョンは、ハードウェアおよびソフトウェア要件を説明する技術文書にリストされています。詳細については、13 ページの『ハードウェアおよびソフトウェア要件』を参照してください。
3. 37 ページの『第 5 章 ネットワークを横断するコネクタ・エージェントの分散』の説明に従って、WebSphere MQ Internet Pass-Thru をインストールおよび構成します。
4. 使用する統合ブローカーに応じて、以下の手順を実行します。
 - 統合ブローカーが WebSphere Application Server、またはサポートされているメッセージング・ブローカーのいずれかである場合は、以下の手順を実行します。
 - a. 「*Installing WebSphere Business Integration Adapters, V. 2.6*」の説明に従って、Adapter Framework をインストールします。次に、「*Installing Adapter Framework Fix Pack 2.6.0.3*」技術情報の説明に従って、Adapter Framework フィックスパック 2.6.0.3 を適用します。
 - b. この環境にインストールする予定の各アダプターについて、それぞれのガイドの『コネクタのインストールおよび構成 (Installing and configuring the connector)』という見出しの章を読み、この環境に必要なデータ・ハンドラー要件を判断します。
 - c. 「*Installing WebSphere Business Integration Adapters, V. 2.6*」の説明に従って、この環境に必要な各データ・ハンドラーをインストールします。
 - d. 20 ページの『アダプターのインストール』の説明に従って、この環境に必要な各アダプターをインストールします。
 - 統合ブローカーが WebSphere InterChange Server である場合は、以下の手順を実行します。
 - a. 分散コンピューター上で Adapter Framework インストーラーを実行し、そこにアダプター・フレームワークをインストールします。詳細については、「*Installing WebSphere Business Integration Adapters, V. 2.6*」を参照してください。

InterChange Server 構成ウィザードが表示されたら、InterChange Server をブローカー・ホスト・コンピューターにインストールしたときと同じ構成値を指定します。

- b. 20 ページの『アダプターのインストール』の説明に従って、分散コンピューターにアダプターをインストールします。

「IBM WebSphere InterChange Server」画面で、ブローカー・ホスト・コンピューター上の InterChange Server インスタンスの名前を指定します。
- c. repository ディレクトリーで作成されたコネクタ定義を、「*WebSphere Interchange Server システム・インプリメンテーション・ガイド*」の説明に従って、ご使用の開発環境にインポートします。
- d. アダプターのガイドの説明に従って、コネクタを構成します。

- e. 「WebSphere Interchange Server システム・インプリメンテーション・ガイド」の説明に従って、コネクタを InterChange Server リポジトリに配置します。
5. この環境に必要な各アダプターのガイドの説明に従って、アダプター・ホスト・コンピューターへのアプリケーション・クライアントのインストールなど、アダプター固有のインストール・ステップを実行します。

アダプター開発環境

カスタム・アダプターを作成するには、アダプター開発環境を作成する必要があります。ブローカーがインストールされ、アダプターが実行されている環境でアダプターを開発することもできますが、アダプター開発専用の環境を排他的に使用することもできます。

7 ページの図 1 の環境 4 は、このタイプの環境を表したものです。

アダプター開発環境を作成するには、以下の手順に従います。

1. ハードウェア要件を満たすコンピューターを必要な環境ごとに 1 台ずつ用意します。

ハードウェア要件について詳しくは、13 ページの『ハードウェアおよびソフトウェア要件』を参照してください。

2. 「*Installing WebSphere Business Integration Adapters, V. 2.6*」の説明に従って、Adapter Framework をインストールします。次に、「*Installing Adapter Framework Fix Pack 2.6.0.3*」技術情報の説明に従って、Adapter Framework フィックスパック 2.6.0.3 を適用します。
3. 「*Installing WebSphere Business Integration Adapters, V. 2.6*」の説明に従って、開発するアダプターに必要な各データ・ハンドラーをインストールします。
4. 「*Installing WebSphere Business Integration Adapters, V. 2.6*」の説明に従って、Adapter Development Kit をインストールします。
5. アダプターの開発に使用する言語に適したコンパイラーをインストールします。
 - C 言語または C++ 言語を使用してアダプターを開発する場合は、C コンパイラーまたは C++ コンパイラーをインストールします。
 - Java を使用してアダプターを開発する場合は、次の手順に従って、IBM Java Development Kit をインストールします。1 枚の CD に、Windows、AIX、HP-UX、Solaris、および Linux 向けの JDK が格納されています。

注: 2.6 フレームワークに Adapter Framework フィックスパック 2.6.0.3 を適用した場合、IBM Java Development Kit のコピーが <install location>/jdk にインストールされます。Adapter Framework フィックスパック 2.6.0.3 を適用しなかった場合は、14 ページの『IBM Java Development Kit のインストール』を参照してください。

第 2 章 インストール要件

本章の内容は、次のとおりです。

- 『ハードウェアおよびソフトウェア要件』
- 『他のソフトウェアのインストールおよび構成』
- 14 ページの『データ・ハンドラー要件』

IBM WebSphere Business Integration Adapter ソフトウェアをインストールする前に、必要な前提条件がすべて満たされていることを確認してください。本章のトピックでは、システムのハードウェア要件とソフトウェア要件、前提ソフトウェア、および WebSphere Business Integration Adapter の実行に必要なユーザー・アカウントについて概説します。

ハードウェアおよびソフトウェア要件

ご使用のアダプターのハードウェアおよびソフトウェア要件の詳細な説明については、<http://www.ibm.com/support/docview.wss?uid=swg27006249> に掲載されている技術文書を参照してください。

他のソフトウェアのインストールおよび構成

このセクションには、WebSphere Business Integration Adapter に同梱されていないソフトウェア、および必ずしも独自の資料が用意されていないソフトウェアのインストールおよび構成に関する情報が含まれます。以下のタスクを実行する場合は、必要に応じて、本書の他のセクションを参照してください。

X エミュレーション用の環境の構成

UNIX コンピューター上でインストールを行う場合、ただし、UNIX コンピューターへの接続に Windows コンピューターを使用している場合は、以下の手順を実行して X エミュレーション用の環境を構成します。

1. UNIX コンピューターへの接続に使用している Windows コンピューターの IP アドレスを判別します。

Windows コマンド行インターフェースで `ipconfig` コマンドを実行すると、Windows コンピューターの IP アドレスが表示されます。

2. UNIX コンピューターの `DISPLAY` 環境変数を、ステップ 1 で確認した IP アドレスに設定します。

IP アドレスの後には、コロンと、Windows クライアント・コンピューターのモニターまたはディスプレイの ID を設定する必要があります。Windows クライアント・コンピューターに単一のモニターしかない場合は、ディスプレイ値は `0.0` になります。

以下に示すのは、IP アドレスが `9.26.244.30` である Windows コンピューターで、単一のモニターを設定された `DISPLAY` 環境変数の例です。

DISPLAY=9.26.244.30:0.0

3. 次のコマンドを実行して、UNIX コンピューターの DISPLAY 環境変数をエクスポートします。

```
export DISPLAY
```

4. Windows コンピューター上で X エミュレーションを始動し、UNIX コンピューターに接続します。

IBM Java Development Kit のインストール

すべてのサポートされるプラットフォーム (Windows、Solaris、AIX、HP-UX、および Linux) 向けの IBM Java Development Kit (JDK) が、Adapter Framework フィックスパック 2.6.0.3 にパッケージされています。このフィックスパックを適用すると、IBM JDK が <install location>/jdk ディレクトリーにインストールされます。フィックスパックの入手については、フィックスパック・ダウンロード・サイトにアクセスしてください。フィックスパック 2.6.0.3 を適用しなかった場合、Adapter Framework 2.6 メディア・パッケージに含まれる CD から IBM JDK をインストールすることができます。

データ・ハンドラー要件

表 2 に、データ・ハンドラー要件 (ある場合) をそれぞれのアダプターごとに示します。

表 2. アダプターのデータ・ハンドラー要件

IBM WebSphere Business Integration Adapter の種類	必要とされるデータ・ハンドラー
ACORD XML	XML
eMail	XML
Complex Data Handler	XML
SAP Exchange Infrastructure (バージョン 1.0.0)	XML
HTTP	XML
i2	XML
PeopleSoft	XML
NightFire Applications	XML
Siebel eBusiness Applications	XML
Telcordia	XML
WebSphere Commerce	XML
WebSphere Business Integration Message Broker	XML
WebSphere MQ Workflow	XML
XML	XML
QAD MFG/PRO	XML

注: Data Handler for Complex Data は AIX 5.2 および WBIA 2.4 でサポートされています。

第 3 章 WebSphere Business Integration Adapters 製品のインストール

この章では、WebSphere Business Integration Adapters のインストール方法を説明します。

アダプターを前のバージョンからアップグレードする場合は、ご使用のブローカーのインストール・ガイドまたはインプリメンテーション・ガイドの説明に従って、まず統合ブローカー・システムをバックアップしてください。

本章の内容は、次のとおりです。

- 『インストール・メディアの準備』
- 17 ページの『インストール・メディアを使用するための一般的手順』
- 20 ページの『アダプターのインストール』
- 25 ページの『WBIA のディレクトリー、ファイル、および環境変数』
- 28 ページの『Windows サービスとして実行するアダプターの登録』

インストール・メディアの準備

ご使用のインストール・メディアに応じて、以下のいずれかのセクションのステップを実行してください。

- 『製品 CD の準備』
- 16 ページの『パスポート・アドバンテージ®の使用』

製品 CD の準備

WebSphere Business Integration Adapters 製品が CD 上にある場合は、ご使用のオペレーティング・システムに応じて以下を実行し、インストールできるようにコンピューターを準備してください。

- AIX の場合:

製品 CD を AIX コンピューターの CD ドライブに挿入し、次のコマンドを実行して CD をマウントします。

```
mount -V cdrfs -o ro /dev/cd0 /cdrom
```

- Windows の場合:

製品 CD を Windows コンピューターの CD ドライブに挿入します。CD が自動的に実行されない場合は、「マイ コンピュータ」にナビゲートし、CD ドライブ `wbia` をダブルクリックし、Windows フォルダを開いて、`setupwin32.exe` を実行します。

- Solaris の場合:

製品 CD を Solaris コンピューターの CD ドライブに挿入し、次のコマンドを実行して CD をマウントします。

```
mount -r -F hsfs /dev/sr0 /cdrom
```

- HP-UX の場合:

製品 CD を HP-UX コンピューターの CD ドライブに挿入し、次のコマンドを実行して CD をマウントします。

1. 次のコマンドを実行し、PFS 取り付けデーモンを開始します。

```
/usr/sbin/pfs_mountd &  
/usr/sbin/pfsd &
```

2. 次のような行を `etc/pfs_fstab` ファイルに追加します。

```
/dev/dsk/cdrom_device /mount_point pfs-iso9660  
xlat=unix 0 0
```

`cdrom_device` は CD-ROM ディスク装置 (c3t2d0 など) の ID であり、`/mount_point` は、CD にアクセスする際に必要なマウント・ポイント (/cdrom など) です。

3. 次のコマンドを実行して CD をマウントします。

```
mount /mount_point
```

`/mount_point` は、前のステップで指定したマウント・ポイントです。

- Linux の場合:

製品 CD を Linux コンピューターの CD ドライブに挿入し、次のコマンドを実行します。

1. SuSE で、CD-ROM デスクトップ・アイコンをクリックします。これにより、CD の内容を表示するブラウザー・ウィンドウ (Konqueror ブラウザー) が開きます。

Red Hat では、CD が挿入されると CD デスクトップ・アイコンが (デスクトップに) 表示されます。CD アイコンをダブルクリックします。これにより、CD の内容を表示するファイル・ブラウザー (Nautilus) が開きます。

2. SuSE では、UNIX ディレクトリーをクリックしてから、`setupLinux.bin` ファイルをクリックしてインストーラーを起動します。

Red Hat では、UNIX ディレクトリーをダブルクリックしてから、`setupLinux.bin` ファイルをダブルクリックしてインストーラーを起動します。

3. インストーラーのプロンプトに従って、インストールを完了します。

パスポート・アドバンテージ®の使用

パスポート・アドバンテージから WebSphere Business Integration Adapters 製品を入手する場合は、以下のようにして、インストール・メディアの準備をしてください。

- Windows の場合は、パスポート・アドバンテージから自己解凍型実行可能ファイルをダウンロードし、ダブルクリックしてインストール・ファイルを解凍します。
- UNIX の場合は、パスポート・アドバンテージから圧縮された `.tar` ファイルをダウンロードしてから、インストール・ファイルを解凍します。

注: パスポート・アドバンテージのソフトウェアの取得については、IBM 担当員にお尋ねください。

インストール・メディアを使用するための一般的手順

このセクションでは、インストール・メディアを使用するための一般的手順について説明します。このガイドの他のセクションで、このセクションの内容を参照します。

グラフィカル WBIA インストーラーの起動

グラフィカルな WebSphere Business Integration Adapters Installer ではウィザードが表示され、ユーザーは WebSphere Business Integration Adapters のインストールに関して選択を行うことができます。異なる製品インストーラーごとにプラットフォーム固有の実行可能ファイルを実行して、インストーラーを起動します。製品インストーラーは、CD またはパスポート・アドバンテージのどちらから入手しても同じものです。このセクションでは、Windows および UNIX コンピューター上の WebSphere Business Integration Adapters 製品について、インストーラーを起動する方法を説明します。

Windows 環境でのインストーラーの起動

Windows 環境に WebSphere Business Integration Adapters をインストールする前に、管理者特権でログインしていることを確認してください。Windows 環境でインストーラーを起動するには、インストール・メディアの Windows ディレクトリーに移動し、`setupwin32.exe` を実行します。

UNIX 環境でのインストーラーの起動

UNIX 環境の WBIA インストーラーは、インストール・メディアの UNIX ディレクトリーにあるプラットフォーム固有の `.bin` ファイルで起動します。

UNIX ベースのコンピューターにインストールする場合、作成されたフォルダーおよびファイルの許可は、インストールを実行するユーザー・アカウントの許可に基づいて設定されます。AIX コンピューターの場合は、WebSphere Business Integration Adapters を `root` としてインストールしないでください。`root` としてインストールすると Object Data Manager (ODM) に追加されるエントリーが原因で、System Management Interface Tool (SMIT) を使用して他のアプリケーションをアンインストールすることができなくなるので、WBIA を `root` としてインストールしないでください。

UNIX コンピューターでの作業方法に応じて以下のいずれかのセクションに示すステップを実行し、インストーラーを起動します。

- 『UNIX コンピューターで Common Desktop Environment CDE を実行する場合』
- 18 ページの『X エミュレーション・ソフトウェアを使用して UNIX コンピューターに接続している場合』

UNIX コンピューターで Common Desktop Environment CDE を実行する場合:

インストール・メディアの UNIX ディレクトリーに移動し、オペレーティング・システム固有の `.bin` ファイルをダブルクリックします。

また、インストール・メディアの UNIX ディレクトリーにナビゲートし、コマンド行で `.bin` ファイルを実行することもできます。次の例は、AIX コンピューターでの実行方法を示しています。

```
# ./setupAIX.bin
```

X エミュレーション・ソフトウェアを使用して UNIX コンピューターに接続している場合: 以下の操作を実行してインストーラーを起動します。

1. 13 ページの『X エミュレーション用の環境の構成』のステップに従います。
2. オペレーティング・システム固有の `.bin` ファイルを実行します。次の例は、AIX コンピューターでの実行方法を示しています。

```
# ./setupAIX.bin
```

UNIX コンピューターへの接続に使用している Windows コンピューター上で、グラフィカル・インストーラーが始動します。

注: エミュレーション・ソフトウェアを使用して UNIX コンピューター上で作業している場合は、アクセス支援ホット・キーは機能しません。アクセス支援ホット・キーを使用するには、直接 UNIX コンピューター上で作業する必要があります。

サイレント・インストールの実行

WebSphere Business Integration Adapters ではサイレント・インストールを実行できます。この場合、インストール・ウィザードの画面ではなく、ファイルでインストール選択項目を指定します。同一のインストールを繰り返し実行する必要がある場合、この方法は特に便利です。

サイレント・インストールを実行するには、『インストール応答ファイルの作成』の説明に従いインストール選択項目を指定したファイルを作成し、次に 19 ページの『サイレント・インストールの実行』の説明に従いそのファイルを使用してインストールを実行します。異なるタイプの WebSphere Business Integration Adapters 製品のインストールを説明した次のセクションでは、各製品タイプに固有のインストール・オプションを取り上げています。

- 22 ページの『Windows システムでのアダプターのサイレント・インストール』

インストール応答ファイルの作成

サイレント・インストールを実行する場合は、インストール選択項目を指定した応答ファイル (またはオプション・ファイル) を作成します。IBM では、各 WebSphere Business Integration Adapters 製品のオプションを含む応答ファイルのテンプレートを提供しています。応答ファイル・テンプレートは、`settings.txt` という名前が付けられており、その他のインストール・ファイルと一緒に提供されています。

複数のマシンで同一のインストールを実行する場合は、最初のインストール時の選択を簡単にファイルに記録し、そのファイルをインストール応答ファイルとして使用して、後続のインストールを実行できます。詳しくは、25 ページの『インストールの選択項目の記録』を参照してください。

次のテーブルには、各タイプの WebSphere Business Integration Adapters 製品に使用できるオプションがリストされています。

- 22 ページの表 3
- 24 ページの表 4

オプション値列内の情報にはすべて目を通してください。この列には、特定のオプションをコメント化するべき場合と、ブローカーとプラットフォームの適合性が示してあります。

応答ファイルのテンプレートのいずれかを変更し、それをサイレント・インストールに使用することができます。この場合、必要なオプションと矛盾する他のすべてのオプションは、先頭にハッシュ記号 # を置くことによってコメント化します。または、必要なオプションを含む新規の応答ファイルを作成することもできます。この方法では、応答ファイルを混乱させる不必要なオプションやコメント化された記述ブロックが存在せず、読みやすく、編集が容易になるので便利です。後者の方法を実行する場合、必要なオプションを新規ファイルに入力するよりも、テンプレート・ファイルをコピーして、不要なセクションやオプションを除去することをお勧めします。

注: 応答ファイル内のオプションの前には、スペースを入れることはできません。

サイレント・インストールの実行

サイレント・インストールを実行するには、コマンド行で、プラットフォーム固有のインストーラー実行可能ファイルをいくつかのオプション (作成した応答ファイル名を含む) と共に実行します。

次の例は、応答ファイルが C:%data ディレクトリーにある、Windows コンピューターでそれを実行する方法を示しています。

```
D:%WebSphereBI>setupwin32.exe -silent -options C:%data%settings.txt
```

次の例は、install.txt という名前のカスタム応答ファイルが /home/wbia ディレクトリーに作成されている、AIX コンピューターでそれを実行する方法を示しています。

```
# ./setupAIX.bin -silent -options /home/wbia/install.txt
```

アダプター・フレームワークのインストール

WebSphere Business Integration Adapters では、先にアダプター・フレームワークをインストールする必要があります。そのためには、Adapter Framework バージョン 2.6 および Adapter Framework フィックスパック 2.6.0.3 を含む製品を入手する必要があります。フィックスパックをダウンロードするには、フィックスパック・ダウンロード・サイトにアクセスしてください。

データ・ハンドラーのインストール

一部の WebSphere Business Integration Adapters では、アダプター・フレームワークのインストール後、アダプターをインストールする前に、データ・ハンドラーをインストールする必要があります。そのためには、アダプターが必要とするデータ・ハンドラーを含む製品を入手する必要があります。アダプターがどのデータ・ハン

ドラーを必要とするかについては、14 ページの『データ・ハンドラー要件』を参照してください。必要なデータ・ハンドラーを含む製品を入手するには、IBM 担当員にお問い合わせください。

アダプターのインストール

1 ページの『第 1 章 インストールの概要』 の手順の概要で指示されている場合は、以下のいずれかのセクションの指示に従って、アダプターをインストールしてください。

- 『グラフィカル・インストーラーを使用したアダプターのインストール』
- 22 ページの『Windows システムでのアダプターのサイレント・インストール』
- 23 ページの『UNIX および Linux システムでのアダプターのサイレント・インストール』
- 25 ページの『インストールの選択項目の記録』

UNIX プラットフォームでは、ファイル名の大/小文字の区別があります。ファイル名の大/小文字を変更すると、アダプターの始動が失敗し、ログにエラーが記録されます。アダプターを始動しようとしてエラーを受け取った場合は、Connector Configurator リポジトリの XSD ファイルのファイル名を確認してください。XSD ファイルには、小文字の .xsd 拡張子が必ず付いています。例えば、ファイル名を Customer.XSD にすると、アダプターの始動が失敗します。この場合は、ファイル名を Customer.xsd に変える必要があります。

グラフィカル・インストーラーを使用したアダプターのインストール

グラフィカル・インストーラーを使用してアダプターをインストールするには、以下の手順に従ってください。

1. 17 ページの『グラフィカル WBIA インストーラーの起動』の説明に従って、アダプターのインストーラーを起動します。
2. 言語選択のプロンプトが出されたら、ドロップダウン・メニューから任意の言語を選択し、「了解」をクリックします。
3. 初期画面で、「次へ」をクリックします。

注: `java -jar setup.jar` コマンドを使用してインストーラーを起動した場合、インストール・プログラムでは、バージョン 1.4 以上の Java ランタイム環境 (JRE) が必要です。この条件が満たされない場合、インストーラーは、JRE 1.4 以上をインストールしてからインストーラーを再起動するように指示するエラー・メッセージを表示します。「取り消し」をクリックし、JRE をインストールまたはアップグレードします。

4. 「ソフトウェア・ライセンス情報」画面で、「使用条件の条項に同意します。」をクリックし、「次へ」をクリックします。

注: インストーラーは、この時点での一定のソフトウェア前提条件が満たされているかどうかを検査します。前提ソフトウェアが検出されないと、インストーラーはそのことを画面に表示し、アダプターのインストールを続行する前に、前提ソフトウェアをインストールするか、またはそれが存在するディレ

クトリーを入力する必要があることを示します。必要なソフトウェアをインストールするか、またはそのソフトウェアのロケーションを参照して、WebSphere Business Integration Adapters インストーラーを再始動します。

5. 製品のディレクトリー画面では、アダプターのインストール先を指定できます。アダプター・インストーラーは、Adapter Framework のインストール・ロケーションを探索し、検出した場合は、そのパスをデフォルトで表示します。検出しない場合は、デフォルトとして、Windows の場合は C:¥IBM¥WebSphereAdapters、UNIX の場合は /opt/IBM/WebSphereAdapters と表示されます。

別のディレクトリーを指定できますが、そこには、Adapter Framework と互換性のあるバージョンのインストールが含まれている必要があります。

Adapter Framework をインストールする方法については、19 ページの『アダプター・フレームワークのインストール』を参照してください。WebSphere InterChange Server のインストール方法の詳細については、「システム・インストール・ガイド (Windows 版)」または「システム・インストール・ガイド (UNIX 版)」を参照してください。

製品ディレクトリー画面で、以下のいずれかの作業を行います。

- 「ブラウズ」をクリックしてディレクトリーを選択し、「次へ」をクリックする。
 - デフォルト・パスを受け入れ、「次へ」をクリックする。
6. 要約画面に、インストールされる機能、指定された製品ディレクトリー、および必要なディスク・スペースがリストされます。情報を確認してから、「次へ」をクリックします。
 7. ブローカー名の画面で、ご使用の統合ブローカーに応じて、以下のいずれかの作業を行います。
 - 統合ブローカーが WebSphere InterChange Server の場合は、アダプターが通信する InterChange Server インスタンスの名前を「**IBM WebSphere InterChange Server 名**」フィールドに入力します。アダプターを Microsoft Windows サービスとして登録する場合は、「**Windows サービス**」チェック・ボックスをクリックします。それから「次へ」をクリックします。

注: Adapter Framework フィックスパック 2.6.0.3 を適用しなかった場合、Windows サービスとしての登録は、使用されるブローカーが WebSphere Interchange Server の場合にのみサポートされます。インストーラーは、自動的に空きポート番号を計算して、Windows サービスとして実行されるようにアダプターを登録します。

- WebSphere InterChange Server 以外の統合ブローカーを使用している場合は、「次へ」をクリックします。
8. Windows コンピューター上にインストールしている場合、インストーラーは「プログラム・フォルダーの選択 (program folder selection)」画面を表示します。「**プログラム・グループ (Program Group)**」フィールドに、アダプターのショートカットを作成したいプログラム・グループの名前を入力するか、デフォルトのプログラム・グループを受け入れてから、「次へ」をクリックします。
 9. インストーラーが正常に終了したら、「終了」をクリックします。

注: ご使用の統合ブローカーが ICS で、リモート・システムにインストールされている場合、アダプターの構成ファイルを ICS システムに移動する必要があります。そのようにすることで、リモート ICS マシン上の Connector Configurator がアダプター構成ファイルを使用可能になります。アダプター構成ファイルを見つけるには、ご使用のアダプターのユーザーズ・ガイド内のインストール済みファイルの構造の表を参照してください。構成ファイルには、通常 `<adapter name>ConnectorTemplate` という名前が付けられます。次に、このファイルを、ICS ホスト・マシンで実行する Connector Configurator インスタンスのディレクトリに移動します。ICS および Connector Configurator のインストール済みファイル構造の詳細については、ご使用のプラットフォームの「システム・インストール・ガイド」を参照してください。ICS 統合ブローカーを使用しない場合、または ICS ブローカーがアダプターと同一のマシン上に存在する場合、アダプター構成ファイルを転送する必要はありません。

Windows システムでのアダプターのサイレント・インストール

Windows システムにアダプターをサイレント・インストールするには、以下の手順に従ってください。

1. 18 ページの『インストール応答ファイルの作成』の説明に従って、表 3 にリストされた必要なオプションを使用し、アダプターをインストールする応答ファイルを準備します。

表 3. Windows システムのアダプターのサイレント・インストール・オプション

オプション名	オプション値
-W destination.path	このオプションは、WebSphere Business Integration Adapters 製品をインストールするディレクトリー・パスに設定します。例えば、次のようになります。 -W destination.path="C:¥IBM¥WebSphereAdapters" インストール・パスにスペースを入れることはできません。インストール・ロケーションには、Adapter Framework の互換バージョンが格納されている必要があります。
-W inputServer.name	IBM WebSphere InterChange Server をブローカーとして使用している場合、有効な InterChange Server 名を指定します。この名前は、以下の基準を満たす必要があります。1. 80 文字より短い。2. スペースを含んではならない。3. 英字 (a から z、A から Z) で始まらなければならない。4. 英字および数字のみを含んでいなければならない。 WebSphere Interchange Server をブローカーとして使用していない場合は、このオプションをコメント化します。
-W inputShortcuts.folder	このオプションは、WBIA 製品用に作成されたプログラム・グループの名前 (例えば IBM WebSphere Business Integration Adapters) に設定します。
-W inputServer.adapterService	アダプターを Windows サービスとして登録する場合は、このオプションを yes に設定します。アダプターを Windows サービスとして登録しない場合は、このオプションを no に設定します。

表 3. Windows システムのアダプターのサイレント・インストール・オプション (続き)

オプション名	オプション値
-G createDirectoryResponse=	このオプション (yes または no) を設定して、宛先ディレクトリがまだ存在しない場合、ディレクトリを作成するかどうかを指定します。
-G replaceExistingResponse	<p>インストーラーによってコピーされているファイルと同じ名前を持つ、システム上で検出されたすべてのファイルを置き換える場合、このオプションは yesToAll または yes に設定します。</p> <p>インストーラーによってコピーされているファイルと同じ名前を持つ、システム上で検出されたいかなるファイルも置き換えない場合、このオプションは noToAll または no に設定します。</p>
-G replaceNewerResponses	<p>インストーラーによってコピーされているファイルより新しい、システム上で検出されたすべてのファイルを置き換える場合、このオプションは yesToAll または yes に設定します。</p> <p>インストーラーによってコピーされているファイルより新しい、システム上で検出されたいかなるファイルも置き換えない場合、このオプションは noToAll または no に設定します。</p>
-G removeExistingResponse	このオプションは、システムに存在する応答ファイルを削除するかどうかを指定します。このオプションは、アンインストールの場合にのみ使用されます。既存の応答ファイルを削除する場合は、このオプションを yestoall または yes に設定します。システムの既存ファイルを残す場合は、notoall または no に設定します。
-G removeModifiedResponse	このオプションは、最後にインストールされてから変更された応答ファイルを削除するかどうかを指定します。このオプションは、アンインストールの場合にのみ使用されます。変更された応答ファイルを削除する場合は、このオプションを yestoall または yes に設定します。変更されたファイルがシステムに残す場合は、notoall または no に設定します。

2. 19 ページの『サイレント・インストールの実行』の説明に従って、ステップ 1 (22 ページ) で準備した応答ファイルを使用し、サイレント・インストールを実行します。

UNIX および Linux システムでのアダプターのサイレント・インストール

UNIX および Linux システムにアダプターをサイレント・インストールするには、以下の手順に従ってください。

1. 18 ページの『インストール応答ファイルの作成』の説明に従って、22 ページの表 3 にリストされた必要なオプションを使用し、アダプターをインストールする応答ファイルを準備します。

表 4. UNIX および Linux システムのアダプターのサイレント・インストール・オプション

オプション名	オプション値
-W destination.path	<p>このオプションは、WebSphere Business Integration Adapters 製品をインストールするディレクトリー・パスに設定します。例えば、次のようになります。</p> <p><code>-W destination.path="C:¥IBM¥WebSphereAdapters"</code></p> <p>インストール・パスにスペースを入れることはできません。インストール・ロケーションには、Adapter Framework の互換バージョンが格納されている必要があります。</p>
-W inputServer.name	<p>IBM WebSphere InterChange Server をブローカーとして使用している場合、有効な InterChange Server 名を指定します。この名前は、以下の基準を満たす必要があります。1. 80 文字より短い。2. スペースを含んではならない。3. 英字 (a から z、A から Z) で始まらなければならない。4. 英字および数字のみを含んでいなければならない。</p> <p>WebSphere Interchange Server をブローカーとして使用していない場合は、このオプションをコメント化します。</p>
-G createDirectoryResponse=	<p>このオプション (yes または no) を設定して、宛先ディレクトリーがまだ存在しない場合、ディレクトリーを作成するかどうかを指定します。</p>
-G replaceExistingResponse	<p>インストーラーによってコピーされているファイルと同じ名前を持つ、システム上で検出されたすべてのファイルを置き換える場合、このオプションは yesToAll または yes に設定します。</p> <p>インストーラーによってコピーされているファイルと同じ名前を持つ、システム上で検出されたいかなるファイルも置き換えない場合、このオプションは noToAll または no に設定します。</p>
-G replaceNewerResponses	<p>インストーラーによってコピーされているファイルより新しい、システム上で検出されたすべてのファイルを置き換える場合、このオプションは yesToAll または yes に設定します。</p> <p>インストーラーによってコピーされているファイルより新しい、システム上で検出されたいかなるファイルも置き換えない場合、このオプションは noToAll または no に設定します。</p>
-G removeExistingResponse	<p>このオプションは、システムに存在する応答ファイルを削除するかどうかを指定します。このオプションは、アンインストールの場合にのみ使用されます。既存の応答ファイルを削除する場合は、このオプションを yestoall または yes に設定します。システムの既存ファイルを残す場合は、notoall または no に設定します。</p>
-G removeModifiedResponse	<p>このオプションは、最後にインストールされてから変更された応答ファイルを削除するかどうかを指定します。このオプションは、アンインストールの場合にのみ使用されます。変更された応答ファイルを削除する場合は、このオプションを yestoall または yes に設定します。変更されたファイルがシステムに残す場合は、notoall または no に設定します。</p>

2. 19 ページの『サイレント・インストールの実行』の説明に従って、ステップ 1 (22 ページ) で準備した応答ファイルを使用し、サイレント・インストールを実行します。

インストールの選択項目の記録

コマンド行からインストール・プログラムを呼び出すときに特別なオプションを使用して、インストールの選択項目をファイルに記録できます。インストールの完了時に、コマンド行で指定したファイルにインストールの選択項目が記録されます。このファイルに記録されるインストール情報は、インストール設定の記録として、および他のマシンにサイレント・インストールを行う場合の応答ファイルとして使用できます。

このファイルを作成するには、コマンド行から以下のコマンドを入力します。

```
<installation launcher executable> -options-record <filename>
```

例えば、コマンド・ウィンドウで以下のコマンドを入力し、アダプター・インストールのインストール選択項目を Windows コンピューターに記録します。

```
setupwin32.exe -options-record C:%data%settings.txt
```

WBIA のディレクトリー、ファイル、および環境変数

インストーラーの実行中に行った選択に応じて、多数のディレクトリー、ファイル、および環境変数が作成されます。

WBIA のディレクトリーおよびファイル

インストールが完了すると、ファイル・システムおよびその内容を表示できます。表 5 に、認識しておく必要があるディレクトリーの一部をリストします。作成されるフォルダーやファイルは、インストール時の選択およびオペレーティング・システムによって異なります。

表 5. *WebSphere Business Integration Adapter* のディレクトリー

ディレクトリー名	内容
_jvm	このディレクトリーには、Java ランタイム・ファイルが格納されます。 注: 以前のバージョンの WBIA からアップグレードする場合、そのリリースの既存のディレクトリー名が保持されます。

表 5. WebSphere Business Integration Adapter のディレクトリー (続き)

ディレクトリー名	内容
<code>_uninst_adapter</code>	<p>このディレクトリーには、アダプターのアンインストールに必要なファイルが格納されます。例えば、<code>_uninst_JDBC</code> という名前のディレクトリーには、JDBC 用の WebSphere Business Integration Adapter のアンインストールに必要なファイルが格納されます。</p> <p>WebSphere Business Integration Adapters 製品をアンインストールする方法の詳細については、31 ページの『第 4 章 WebSphere Business Integration Adapters 製品のアンインストール』を参照してください。</p> <p>注: 以前のバージョンの WBIA からアップグレードする場合、そのリリースの既存のディレクトリー名が保持されます。</p>
<code>_uninstZip</code>	このディレクトリーには、プラグイン・ツールに関するログ・ファイルが格納されます。
<code>bin</code>	このディレクトリーには、ビジネス・インテグレーション・アダプターで使用される実行可能ファイルおよびシェル・スクリプトが格納されます。
<code>connectors</code>	このディレクトリーには、システム内の各アダプター固有のファイルが格納されます。また、アダプターがサポートするアプリケーションにインストールする必要があるアダプター固有のファイルも格納されます。
<code>docs</code>	このディレクトリーには、Java ランタイム環境のライセンス・ファイルが格納されます。
<code>installLogs</code>	このディレクトリーには、WebSphere Business Integration Adapters 製品のインストールに関するログ・ファイルが格納されます。
<code>lib</code>	このディレクトリーには、システムの共用ライブラリーおよび <code>.jar</code> ファイルが格納されます。
<code>license_adapter</code>	このディレクトリーには、アダプターのライセンス・ファイルが格納されます。例えば、 <code>_license_JDBC</code> という名前のディレクトリーには、JDBC 用の WebSphere Business Integration Adapter のライセンス・ファイルが格納されます。
<code>logs</code>	このディレクトリーには、ログ・ファイルとトレース・ファイルが格納されます。
<code>connector¥messages</code>	このディレクトリーには、コネクタによるログ・メッセージおよびトレース・メッセージの生成に必要なメッセージ・テキスト・ファイルが格納されます。
<code>oda¥messages</code>	このディレクトリーには、ODA が使用するメッセージ・テキスト・ファイルが格納されます。
<code>ODA</code>	このディレクトリーには、各 Object Discovery Agent の <code>.jar</code> ファイルおよび <code>.bat</code> ファイルが格納されます。
<code>repository</code>	このディレクトリーには、コネクタ定義ファイルが格納されます。

表 5. WebSphere Business Integration Adapter のディレクトリー (続き)

ディレクトリー名	内容
templates	<p>このディレクトリーには、WebSphere MQ キューの作成および消去に必要なサンプル・スクリプト・ファイルが格納されます。</p> <p>ご使用の統合ブローカーが、サポートされるいずれかのメッセージ・ブローカーまたは WebSphere Application Server である場合、これらのスクリプトの使用については、ブローカーのインプリメンテーション・ガイドを参照してください。</p> <p>ご使用の統合ブローカーが WebSphere InterChange Server である場合、該当するプラットフォーム用の InterChange Server インストール・ガイドを参照してください。</p>
jdk	<p>フィックスパック 2.6.0.3 を適用した場合、このディレクトリーには IBM Java Development Kit 1.4.2 sr1 が格納されません。</p>

環境変数

Windows システムで、ブローカーとして、サポートされるいずれかのメッセージ・ブローカーまたは WebSphere Application Server を選択した場合、インストーラーは表 6 で説明するアクションを実行して、コンピューター上の環境変数を作成および更新します。統合ブローカーとして WebSphere InterChange Server を選択した場合、これらのアクションは実行されません。これは、このブローカーに必要な環境変数が、ブローカー自体のインストール時に作成されるためです。

表 6. 環境変数についてインストーラーによって実行されるアクション

環境変数名	インストーラーのアクション
MQ_LIB	ICS によって設定されると、この環境変数を作成して、インストーラーの使用時に指定された、WebSphere MQ インストール・ディレクトリー内の <code>Java%lib</code> ディレクトリーへのパスを格納します。
MQ_LIB_RUNTIME	MQ Java ライブラリーのロケーションを格納し、ICS が設定する MQ_LIB 環境変数との競合を避けます。
PATH	以下のエントリーを追加します。 <code>ProductDir%jre%bin%classic;</code> <code>ProductDir%bin;</code> <code>ProductDir%jre%bin;</code>
WAS_CLIENT_HOME	アダプター・フレームワークは、この変数を WAS クライアント・インストール・ロケーション・ディレクトリーに設定します。WAS が統合ブローカーとして構成されていない場合、この変数はヌルに設定されます。
WBIA_RUNTIME	この環境変数を作成して、アダプター・フレームワークのインストールへのパスを格納します。

Windows サービスとして実行するアダプターの登録

InterChange Server を統合ブローカーとして使用しているかどうかに関わらず、Windows 環境があれば、Windows サービスとして実行されるようにアダプターを登録することができます。以下のセクションでは、その方法を説明します。

InterChange Server をブローカーとして使用する Windows サービスの登録

アダプターのインストール時に、ブローカー名の画面で「Windows サービスを作成する (IBM WebSphere InterChange Server)」チェック・ボックスにチェック・マークを付けます。するとインストーラーは、以下のタスクを実行して、アダプターを Windows サービスとして登録します。

- `start_<adaptername>.bat` を `start_<adaptername>_service.bat` にコピーします。
- 新しい `service.bat` ファイルで、%1 を `adaptername` に置き換えます。
- Replace %2 を InterChange Server 名および `-zport_number` に置き換えます。前に説明したように、インストーラーは自動的にポート番号を計算します。
- `-Xrs` を `JVMArgs` 変数の前に付加します。

するとインストーラーは、`<install_location>%bin%cwservice.exe` を呼び出して、アダプターを Windows サービスとして登録します。インストーラーはサービスを開始しないため、注意してください。アダプターを構成した後は、以下の手続きを実行してサービスを開始することができます。

1. 「スタート」>「設定」>「コントロール パネル」>「管理ツール」>「サービス」を選択します。
2. スクロールして、CWConnector WBI<adaptername>Adapter を選択します。
3. ツールバーの矢印をクリックして、アダプター・サービスを始動します。

ICS 以外のブローカーを使用する Windows サービスの登録

アダプターを、InterChange Server 以外の統合ブローカーを使用する Windows サービスとして登録するには、以下の操作を実行します。

1. Adapter Framework 2.6 をインストールします。
2. Adapter Framework フィックスパック 2.6.0.3 を適用します。
3. アダプターをインストールします。
4. 次のファイルを探し出します。

```
<installation_location>%connectors%<adapter_name>%reg_<adaptername>.bat
```

5. 管理者としてログインし、コマンド行から以下のようにしてこのバッチ・ファイルを起動します。

```
reg_<adaptername>.bat <path to config file> <optional dependent service>
```

ここで `<path_to_config_file>` は、アダプター構成ファイルへの完全修飾パス、`<optional_dependent_service>` は、アダプター・サービスが必要とする従属サービスです。複数の従属サービスをコンマで区切ります。国際化メッセージによって、このユーティリティーへの無効な入力パラメーターに関連するエラーが表示されま

す。アダプターのインストールが正常に行われると、インストーラーはディレクトリー `<install_location>%connectors%\<adaptername>` にユーティリティー `reg_<adaptername>.bat` を置きます。

インストーラーは、bat ファイル内の以下のフィールドを置き換えます。

- ADAPTER_NAME を、インストールしたアダプターの名前に置き換えます。
- WBIA_RUNTIME を、実際のアダプター・インストール・ロケーションに置き換えます。

アダプターが Windows サービスとして実行されていることを確認するには、以下のタスクを実行します。

1. 「スタート」>「設定」>「コントロール パネル」>「管理ツール」>「サービス」を選択します。
2. CWConnector WBI<adaptername>Adapter にスクロールします。
3. サービスが開始していない場合、サービスを選択し、ツールバーの矢印をクリックして、アダプター・サービスを始動します。

第 4 章 WebSphere Business Integration Adapters 製品のアンインストール

この章では、WebSphere Business Integration Adapters 製品のアンインストール方法を説明します。

本章の内容は、次のとおりです。

- 『グラフィカル・アンインストーラーによる WebSphere Business Integration Adapters のアンインストール』
- 34 ページの『サイレント・モードのアンインストールの実行』

注: Adapter Framework 以外に、アダプター、データ・ハンドラー、または Adapter Development Kit などの他のコンポーネントもアンインストールする必要がある場合は、Adapter Framework を最後にアンインストールしてください。これは、Adapter Framework をアンインストールすると、その他の製品のアンインストールに必要な Java ランタイム環境も削除されるからです。

注: WebSphere Business Integration Toolset もアンインストールするように選択しなければ、アダプター・フレームワーク・コンポーネントをアンインストールできません。ツール・セットは独立してアンインストールできます。

グラフィカル・アンインストーラーによる WebSphere Business Integration Adapters のアンインストール

以下の手順に従い、グラフィカル・アンインストーラーを使用して WebSphere Business Integration Adapters をアンインストールします。

1. 『グラフィカル・アンインストーラーの起動』の説明に従い、グラフィカル・アンインストーラーを開始します。
2. 34 ページの『グラフィカル・アンインストーラーの使用法』の説明に従い、アンインストール・ウィザードで選択を進めていきます。

グラフィカル・アンインストーラーの起動

WebSphere Business Integration Adapters のコンポーネントのいずれかをアンインストールするには、32 ページの『コマンド行でのグラフィカル・アンインストーラーの起動』で説明されるコマンド行を使用するか、Microsoft Windows 環境を使用している場合は、33 ページの『Windows の「プログラムの追加と削除」コントロール・パネルからのグラフィカル・アンインストーラーの起動』で説明される Windows の「プログラムの追加と削除」コントロール パネルからアンインストーラーを起動することができます。

注: 「プログラムの追加と削除」コントロール パネルからアンインストール・プログラムを起動する方法は、2004 年 6 月以降にリリースされた新規のアダプター・コンポーネントとアダプターの場合にのみ使用可能です。これには、Adapter Framework、すべてのデータ・ハンドラー、およびほとんどのアダプタ

ーが含まれます。ただし、Adapter Development Kit は該当しません。この機能を使用できないすべてのコンポーネントとアダプターについては、v ページの『本書について』の一覧を参照してください。

Adapter Framework をアンインストールするには、33 ページの『Adapter Framework 用グラフィカル・アンインストーラーの起動』の指示に従って操作します。

注: Adapter Framework をアンインストールする前に、WebSphere Business Integration Toolset を含む、WebSphere Business Integration Adapters のコンポーネントをアンインストールしてください。

コマンド行でのグラフィカル・アンインストーラーの起動

注: 次に説明する .bat ファイル・メソッドまたは .sh ファイル・メソッドを使用してアンインストーラーを起動する方法は、2004 年 6 月以降にリリースされた新規のアダプター・コンポーネントとアダプターの場合にのみ使用可能です。これには、Adapter Framework、すべてのデータ・ハンドラー、およびほとんどのアダプターが含まれます。ただし、Adapter Development Kit は該当しません。この機能を使用できないすべてのコンポーネントとアダプターについては、v ページの『本書について』の一覧を参照してください。これらのアダプターの場合は、このセクションの最後で説明される java -jar ファイルのコマンド行を使用してください。

WebSphere Business Integration Adapters コンポーネントにグラフィカル・アンインストーラーを実行するには、コマンド行で次のコマンドを実行してください。

Windows 環境の場合:

```
ProductDir%UninstallDirectory%uninstaller.bat
```

UNIX 環境の場合:

```
ProductDir/UninstallDirectory/uninstaller.sh
```

説明は以下のとおりです。

- *ProductDir* は製品ディレクトリーです。
- *UninstallDirectory* は、アンインストールしたいコンポーネントのアンインストール・ファイルが格納されているディレクトリーです。例えば、_uninst_JDBC には、JDBC 用の WebSphere Business Integration Adapter のアンインストール・ファイルが格納されています。

WebSphere Business Integration Adapters のディレクトリー構造の詳細については、25 ページの『WBIA のディレクトリーおよびファイル』を参照してください。

コマンド行で以下のコマンドを実行することもできます。

```
ProductDir%_jvm%jre%bin%java -jar  
ProductDir%UninstallDirectory%uninstall.jar
```

注: 上述の java -jar メソッドを使用して、2004 年 6 月リリースの WebSphere Business Integration Adapters 以前にリリースされたアダプター・コンポーネントおよびアダプターをアンインストールする必要があります。

Adapter Framework 用グラフィカル・アンインストーラーの起動

注: Adapter Framework フィックスバック 2.6.0.3 を適用した場合は、「*Installing the Adapter Framework Fix Pack 2.6.0.3*」技術情報内の手順を参照してください。下記の手順は、Adapter Framework 2.6 をアンインストールする場合に適用されます。フィックスバック 2.6.0.3 をアンインストールする場合、Adapter Framework 2.6 もまたアンインストールします。

Adapter Framework 用グラフィカル・インストーラーを起動するには、ご使用のオペレーティング・システムに応じて、以下のいずれかのセクションの指示に従ってください。

- 『Windows 環境でアンインストーラーを起動するには』
- 『UNIX 環境でアンインストーラーを起動するには』

Windows ベース・システムの場合は、『Windows の「プログラムの追加と削除」コントロール・パネルからのグラフィカル・アンインストーラーの起動』で説明される Windows の「プログラムの追加と削除」コントロール・パネルを使用することもできます。

注: Adapter Framework をアンインストールする前に、WebSphere Business Integration Toolset を含む、WebSphere Business Integration Adapters のコンポーネントをアンインストールしてください。

Windows 環境でアンインストーラーを起動するには:

`ProductDir/_uninst_AdapterFramework` ディレクトリーにナビゲートし、`uninstaller.exe` を実行します。

UNIX 環境でアンインストーラーを起動するには:

`ProductDir/_uninst_AdapterFramework` ディレクトリーにナビゲートし、WBIA Uninstaller の `uninstaller.bin` を実行します。

Common Desktop Environment を実行していて、UNIX コンピューターで直接作業している場合は、`uninstaller.bin` ファイルをダブルクリックできます。

X エミュレーション・ソフトウェアを使用して Windows コンピューターから UNIX コンピューターに接続している場合は、コマンド行で `uninstaller.bin` ファイルを実行する必要があります。例えば、次のようになります。

```
# ./uninstaller.bin
```

Windows の「プログラムの追加と削除」コントロール・パネルからのグラフィカル・アンインストーラーの起動

以下の手順に従い、「プログラムの追加と削除」コントロール・パネルを使用して、Microsoft Windows ベース・システムから WebSphere Business Integration Adapters をアンインストールします。

1. 「スタート」->「設定」->「コントロール パネル」を選択します。
2. 「プログラムの追加と削除」を選択して、「プログラムの追加と削除」コントロール・パネルを開きます。
3. 「現在インストールされているプログラム」リストから、アンインストールするアダプター、または Adapter Framework を選択します。

4. 「削除」をクリックします。
5. アンインストーラーの指示に従って操作し、アダプターをアンインストールします。

グラフィカル・アンインストーラーの使用法

WebSphere Business Integration Adapters コンポーネントをアンインストールするには、以下の手順に従ってください。

1. 言語選択のプロンプトが出されたら、ドロップダウン・メニューから任意の言語を選択し、「了解」をクリックします。
2. 初期画面で「次へ」をクリックします。
3. 要約の画面に、アンインストールされるコンポーネントとそれらがインストールされていた製品ディレクトリーが示されます。情報を確認してから、「次へ」をクリックします。
4. アンインストーラーが正常に終了したら、「終了」をクリックします。

サイレント・モードのアンインストールの実行

注: 次に説明する .bat ファイルまたは .sh メソッドを使用する方法は、2004 年 6 月以降にリリースされた新規のアダプター・コンポーネントとアダプターの場合にのみ使用可能です。これには、Adapter Framework、すべてのデータ・ハンドラー、およびほとんどのアダプターが含まれます。ただし、Adapter Development Kit は該当しません。この機能を使用できないすべてのコンポーネントとアダプターについては、v ページの『本書について』の一覧を参照してください。これらのアダプターの場合は、このセクションの最後で説明される `java -jar` コマンド行を使用してください。

WebSphere Business Integration Adapters コンポーネントにサイレント・アンインストールを実行するには、コマンド行で次のコマンドを実行してください。

Windows 環境の場合:

```
ProductDir%UninstallDirectory%uninstaller.bat-silent
```

UNIX 環境の場合:

```
ProductDir/UninstallDirectory/uninstaller.sh -silent
```

説明は以下のとおりです。

- *ProductDir* は製品ディレクトリーです。
- *UninstallDirectory* は、アンインストールしたいコンポーネントのアンインストール・ファイルが格納されているディレクトリーです。例えば、_uninst_JDBC には、JDBC 用の WebSphere Business Integration Adapter のアンインストール・ファイルが格納されています。

WebSphere Business Integration Adapters のディレクトリー構造の詳細については、25 ページの『WBIA のディレクトリーおよびファイル』を参照してください。

jre/jdk をインストール済みの場合、コマンド行で以下のコマンドを呼び出すこともできます。

```
java -jar <install location>/_uninstall_<adapter component  
name>/uninstall.jar -silent
```

第 5 章 ネットワークを横断するコネクタ・エージェントの分散

本章の内容は、次のとおりです。

- 『インストールするコンポーネントについて』
- 38 ページの『インストール・タスク』
- 44 ページの『セキュリティー』

この章では、アダプターをインストールし、インターネットを横断する MQ 相互通信を介してビジネス・データを交換する方法について説明します。

注: この機能は、IBM WebSphere InterChange Server が統合ブローカーとして使用されている場合のみサポートされます。

この環境に、Remote Agent テクノロジーと呼ばれるハブ・アンド・スポーク型の機能 (単一のハブ・サイトに 1 つの完全なブローカー・システムをインプリメントし、複数のスポーク・サイトで 1 つのコネクタ・エージェントをインストールして使用するテクノロジー) をインプリメントします。

この機能は、通常、インターネットを横断してファイアウォールも横断する必要のあるデータ交換の場合に使用します。もちろん、ファイアウォールがない状況でもこの機能を使用できます。

インストールするコンポーネントについて

このセクションでは、Remote Agent に必要なオペレーティング・システム要件およびソフトウェア要件について説明します。

オペレーティング・システム要件

Remote Agent テクノロジーは、AIX 5.1、5.2、Windows 2000、2003、Windows XP、Linux、および Sun Solaris 2.8/8.0 でサポートされています。ハブ・サイトおよびスポーク・サイトは、異なるオペレーティング・システムでの稼働が可能です。JRE v. 1.4 も必要です。

アダプターによっては、特定のオペレーティング・システムでしか動作しないものがあります。アダプターにオペレーティング・システムの制限があるかどうかを判断するには、使用するアダプターのガイドを参照してください。

本書では、ご使用のサイトがハブ・サイトであり、IBM WebSphere InterChange Server が Windows 2000 にインストールされているものと想定しています。

ハブ・サイトに必要なソフトウェア

ハブ・サイトへのインストールが必要なコンポーネントは、次のとおりです。

- WebSphere InterChange Server (サポートされる唯一の統合ブローカー)
- サポートされる WebSphere MQ サーバーのバージョン

- WebSphere MQ Internet Pass-Thru (HTTP/HTTPS が構成済みトランスポートの場合に必要となります)
- JRE (Java ランタイム環境)

サポートされるソフトウェア・バージョンについては、13 ページの『ハードウェアおよびソフトウェア要件』を参照してください。

スポーク・サイトに必要なソフトウェア

スポーク・サイトへのインストールが必要なコンポーネントは、次のとおりです。

- データ交換に関連するアダプター、およびアダプターの前提条件となっている WebSphere Business Integration Adapter 製品
- サポートされる WebSphere MQ サーバーのバージョン
- WebSphere MQ Internet Pass-Thru (HTTP/HTTPS が構成済みトランスポートの場合に必要となります)

サポートされるソフトウェア・バージョンについては、13 ページの『ハードウェアおよびソフトウェア要件』を参照してください。

インストール・タスク

MQ 相互通信をインプリメントするには、以下のタスクを実行する必要があります。

- 『インストールの計画』
- 39 ページの『Remote Agent の構成』
- 43 ページの『コネクタとの対話を目的としたアプリケーションの使用可能化』
- 43 ページの『Remote Agent コンポーネントの開始』

インストールの計画

Remote Agent をインストールおよび構成する前に、以下に示すような、インストールの計画に関係するさまざまな考慮事項を解決する必要があります。

- スポーク・サイトにおける構成の設定責任者を誰にするか。

ハブ・サイトでインプリメントする人は、通常、プロセス全体の計画についても主責任を担うため、本章では、ハブ・サイトとスポーク・サイトの両方について、必要なインストール・タスクを説明します。

- ハブ・サイトのセキュリティー要件とは。スポーク・サイトのセキュリティー要件とは。

セキュリティー要件は、取引先のセキュリティー要件によって異なる場合があります。また、取引先間でも要件が異なる場合があります。セキュリティー・レベルを定義する構成プロパティーの設定時に選択可能な項目については、44 ページの『セキュリティー』を参照してください。

- ハブ・サイトとスポーク・サイト間で整合が必要となる構成プロパティーとは。

ハブ・サイトとスポーク・サイト間では、特定の構成プロパティー、ポート番号、およびいくつかのセキュリティー設定の整合が必要となります。

Remote Agent の構成

Remote Agent は、Native WebSphere MQ プロトコルまたは HTTP/HTTPS プロトコルのいずれかを使用して、インターネット経由で通信できるように構成する必要があります。Native WebSphere MQ オプションは、製品に同梱されているソフトウェアのみを使用して構成します。HTTP オプションには、WebSphere MQ Internet Pass-Thru が必要となりますが、これは同梱されていないため、別途で入手する必要があります。このセクションでは、両方の構成について説明します。

注: JMS は、両方の構成で唯一サポートされるトランスポートです。

Native WebSphere MQ

この構成オプションでは、セキュア・ソケット・レイヤー (SSL) とともに WebSphere MQ プロトコルを使用して、インターネットを介したセキュアな通信を確保します。この構成を使用すると、より優れたパフォーマンスが実現します。ただし、WebSphere MQ がファイアウォールを横断できるようにするには、ポートがファイアウォール上で開かれている必要があります。40 ページの図 2 に、この構成を示します。

ブローカーとアダプター間に双方向通信のための WebSphere MQ チャネルを構成する必要があります。2 つのチャネル (それぞれの方向に 1 つずつ) が必要です。

注: 次のステップは、MQ1 と MQ2 がポート 1414 を listen しているものと想定します。

Native WebSphere MQ 用のチャネルを構成するには:

1. チャネル 1 (MQ1 が送信側、MQ2 が受信側の場合):
 - a. MQ1 に送信側チャネル CHANNEL1 を作成します。
 - b. MQ2 に受信側チャネル CHANNEL1 を作成します。
2. チャネル 2 (MQ2 が送信側、MQ1 が受信側の場合):
 - a. MQ2 に送信側チャネル CHANNEL2 を作成します。
 - b. MQ1 に受信側チャネル CHANNEL2 を作成します。
3. ポート 1414 でトラフィックを MQ1 に転送するファイアウォール 1 を構成します。また、ポート 1414 でトラフィックを MQ2 に転送するファイアウォール 2 を構成します。

注: MQ1 と MQ2 はポート 1414 を listen し、ファイアウォールはポート転送に基づくネットワーク・トラフィックを許可するものと想定します。実際の構成は、使用するファイアウォールのタイプによって異なる場合があります。

4. 送信側チャネル 1 の IpAddress をファイアウォール 2 の接続名に設定します。
5. 送信側チャネル 2 の IpAddress をファイアウォール 1 の接続名に設定します。

Native WebSphere MQ 用のキューを構成するには:

1. MQ1 (Q1 をハブ・サイトからスポーク・サイトへの通信に使用):
 - a. Q1 をリモート・キューとして、Q2 をローカル・キューとして設定します。
 - b. MQ2 を Q1 のリモート・キュー・マネージャーとして設定します。
2. MQ2 (Q2 をスポーク・サイトからハブ・サイトへの通信に使用):

- a. Q2 をリモート・キューとして、Q1 をローカル・キューとして設定します。
- b. MQ1 を Q2 のリモート・キュー・マネージャーとして設定します。
3. 各キュー・マネージャーに伝送キューをセットアップします。
4. 各キュー・マネージャーに送達不能キューをセットアップします。
5. 障害キューが各キュー・マネージャーに対してローカルであることを確認します。

`ProductDir\mqseries` に配置されている `RemoteAgentSample.mqsc` および `RemoteServerSample.mqsc` サンプル・スクリプトを参照し、キュー・マネージャーを構成します。

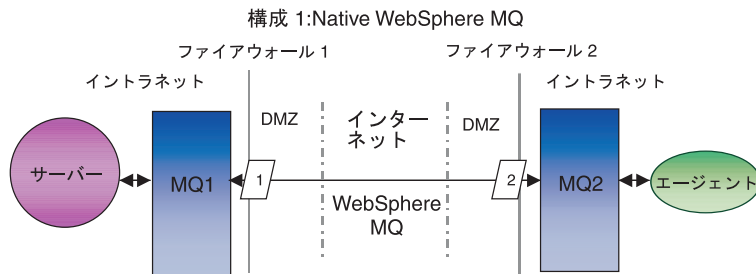


図 2. Native WebSphere MQ の構成

HTTP/HTTPS

この構成オプションは、WebSphere MQ Internet Pass-Thru を使用し、インターネット経由で HTTP を介した情報の受け渡しを行います。43 ページの図 3 に、この構成を示します。

経路を定義して、ポート、IP アドレス、および SSL の詳細を指定する必要があります。ハブ・サイトとスポーク・サイト間に双方向通信のための経路を 2 つ構成する必要があります。各サイトに 2 つの経路 (それぞれの方向に 1 つずつ) が必要です。

ハブ・サイトとスポーク・サイト間に双方向通信のためのチャンネルを構成する必要があります。2 つのチャンネル (それぞれの方向に 1 つずつ) が必要です。

注: 次のステップは、MQ1 と MQ2 がポート 1414 を listen しているものと想定します。

HTTP/HTTPS 用のチャンネルを構成するには:

1. チャンネル 1 (MQ1 が送信側、MQ2 が受信側の場合):
 - a. MQ1 に送信側チャンネル CHANNEL1 を作成します。
 - b. MQ2 に受信側チャンネル CHANNEL1 を作成します。
2. チャンネル 2 (MQ2 が送信側、MQ1 が受信側の場合):
 - a. MQ2 に送信側チャンネル CHANNEL2 を作成します。
 - b. MQ1 に受信側チャンネル CHANNEL2 を作成します。

3. CHANNEL1 の ConnectionName を MQIPT1 の IPAddress および ListenerPort に設定します。
4. CHANNEL2 の ConnectionName を MQIPT2 の IPAddress および ListenerPort に設定します。
5. ListenerPort ですべてのトラフィックが MQIPT1 に転送されるようにファイアウォール 1 を設定します。
6. ListenerPort ですべてのトラフィックが MQIPT2 に転送されるようにファイアウォール 2 を設定します。

HTTP/HTTPS 用のキューを構成するには:

1. MQ1 (Q1 をハブ・サイトからスポーク・サイトへの通信に使用):
 - a. Q1 をリモート・キューとして、Q2 をローカル・キューとして設定します。
 - b. MQ2 を Q1 のリモート・キュー・マネージャーとして設定します。
2. MQ2 (Q2 をスポーク・サイトからハブ・サイトへの通信に使用):
 - a. Q2 をリモート・キューとして、Q1 をローカル・キューとして設定します。
 - b. MQ1 を Q2 のリモート・キュー・マネージャーとして設定します。
3. 各キュー・マネージャーに伝送キューをセットアップします。
4. 各キュー・マネージャーに送達不能キューをセットアップします。
5. 障害キューが各キュー・マネージャーに対してローカルであることを確認します。

ProductDir\mqseries に配置されている RemoteAgentSample.mqsc および RemoteServerSample.mqsc サンプル・スクリプトを参照し、キュー・マネージャーを構成します。

MQIPT1 用の経路を構成するには:

- Route1 — 以下のパラメーターを設定します。
 - ListenerPort = MQIPT1 がキュー・マネージャー MQ1 からのメッセージを listen しているポート
 - Destination = MQIPT2 のドメイン・ネームまたは IP アドレス
 - DestinationPort = MQIPT2 が listen しているポート
 - HTTP = true
 - HTTPS = true
 - HTTPProxy = ファイアウォール 2 の IPAddress (DMZ にプロキシ・サーバーが存在する場合はプロキシ・サーバー)
 - SSLClient = true
 - SSLClientKeyRing = MQIPT1 証明書を含むファイルまでのパス
 - SSLClientKeyRingPW = ClientKeyRing ファイルのパスワードを含むファイルまでのパス
 - SSLClientCAKeyRing = トラステッド CA 証明書を含むファイルまでのパス
 - SSLClientCAKeyRingPW = CAKeyRing ファイルのパスワードを含むファイルまでのパス
- Route2 — 以下のパラメーターを設定します。

- ListenerPort = MQIPT1 が MQIPT2 からのメッセージを listen しているポート
- Destination = キュー・マネージャー MQ1 のドメイン・ネームまたは IPaddress
- DestinationPort = MQ1 が listen しているポート
- SSLServer = true
- SSLServerKeyRing = MQIPT1 証明書を含むファイルまでのパス
- SSLServerKeyRingPW = ServerKeyRing ファイルのパスワードを含むファイルまでのパス
- SSLServerCAKeyRing = トラステッド CA 証明書を含むファイルまでのパス
- SSLServerCAKeyRingPW = CAKeyRing ファイルのパスワードを含むファイルまでのパス

MQIPT2 用の経路を構成するには:

- Route1 - 以下のパラメーターを設定します。
 - ListenerPort = MQIPT2 が MQIPT1 を listen しているポート
 - Destination = キュー・マネージャー MQ2 のドメイン・ネームまたは IPaddress
 - DestinationPort = MQ2 が listen しているポート
 - SSLServer = true
 - SSLServerKeyRing = MQIPT2 証明書を含むファイルまでのパス
 - SSLServerKeyRingPW = ServerKeyRing ファイルのパスワードを含むファイルまでのパス
 - SSLServerCAKeyRing = トラステッド CA 証明書を含むファイルまでのパス
 - SSLServerCAKeyRingPW = CAKeyRing ファイルのパスワードを含むファイルまでのパス
- Route2 - 以下のパラメーターを設定します。
 - ListenerPort = MQIPT2 が MQ2 からのメッセージを listen しているポート
 - Destination = MQIPT1 のドメイン・ネームまたは IP アドレス
 - DestinationPort = MQIPT1 が listen しているポート
 - HTTP = true
 - HTTPS = true
 - HTTPProxy= ファイアウォール 1 の IPaddress (DMZ にプロキシー・サーバーが存在する場合はプロキシー・サーバー)
 - SSLClient = true
 - SSLClientKeyRing = MQIPT2 証明書を含むファイルまでのパス
 - SSLClientKeyRingPW = ClientKeyRing ファイルのパスワードを含むファイルまでのパス
 - SSLClientCAKeyRing = トラステッド CA 証明書を含むファイルまでのパス
 - SSLClientCAKeyRingPW = CAKeyRing ファイルのパスワードを含むファイルまでのパス

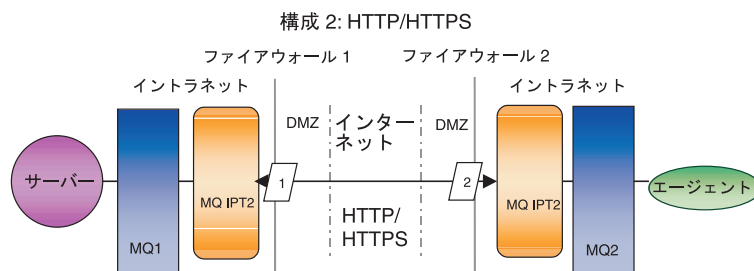


図 3. HTTP/HTTPS の構成

コネクターとの対話を目的としたアプリケーションの使用可能化

この特定の通信モデルを使用して必要な操作を実行できるようにするには、コネクターに対応するいくつかのアプリケーションで構成タスクを実行する必要があります。このような構成タスクが必要であるかどうかを判断するには、ご使用のアダプターのガイドを参照してください。

Remote Agent コンポーネントの開始

Remote Agent を開始するには、以下のコンポーネントが稼働している必要があります。

- 統合ブローカー

WebSphere InterChange Server ブローカーの始動方法の詳細については、「システム・インストール・ガイド (Windows 版)」または「システム・インストール・ガイド (UNIX 版)」を参照してください。

WebSphere Application Server を開始する方法について詳しくは、該当するブローカー資料を参照してください。

サポートされるメッセージ・ブローカーを開始する方法について詳しくは、該当するブローカー資料を参照してください。

- コネクター・エージェント

使用するブローカーが WebSphere InterChange Server である場合、コネクターを開始する方法について詳しくは、「システム管理ガイド」を参照してください。

使用するブローカーが WebSphere Application Server である場合、コネクターを開始する方法について詳しくは、「アダプター実装ガイド (WebSphere Application Server)」を参照してください。

使用するブローカーがサポートされるメッセージ・ブローカーのいずれかである場合、コネクターを開始する方法については、「WebSphere MQ Integrator Broker 用インプリメンテーション・ガイド」を参照してください。

- ハブ・サイトおよびスポーク・サイト両方のキュー・マネージャー

WebSphere MQ サービスを開始する方法について詳しくは、WebSphere MQ 資料を参照してください。

- WebSphere MQ Internet Pass-Thru (HTTP/HTTPS が構成済みトランスポートの場合)

WebSphere MQ Internet Pass-Thru を開始する方法については、WebSphere MQ Internet Pass-Thru 資料を参照してください。

セキュリティ

Remote Agent は、セキュア・ソケット・レイヤー (SSL) プロトコルを使用してセキュリティを提供します。WebSphere MQ および WebSphere MQ Internet Pass-Thru はともに、リンク・レベルで SSL をサポートします。SSL は、Native WebSphere MQ オプションの 2 つのキュー・マネージャー間、および HTTP/HTTPS オプションの 2 つの WebSphere MQ Internet Pass-Thru インストール間で、セキュア接続を提供します。

SSL の構成については、WebSphere MQ 製品資料を参照してください。

第 6 章 WebSphere Business Integration Adapters のアップグレード

本章では、アダプターの開発環境、カスタム開発されたアダプターの実行環境、および WebSphere Business Integration Adapters 製品の一部であるアダプターの実行環境をアップグレードする方法について説明します。以下のセクションに分かれています。

- 『アダプター開発環境のアップグレード』
- 『WebSphere Business Information アダプターのアップグレード』
- 47 ページの『カスタム・アダプターのアップグレード』

注: アダプターを Adapter Framework バージョン 2.6 にマイグレーションするには、「*Migrating Adapters to Adapter Framework, Version 2.6*」を参照してください。Adapter Framework フィックスパック 2.6.0.3 を適用済みの場合、この文書で説明されるマイグレーション手順が適切です。

アダプター開発環境のアップグレード

ご使用の統合ブローカーが、サポートされるメッセージ・ブローカー、または WebSphere Application Server である場合は、以下の手順に従ってアダプター開発環境をアップグレードします。

1. アダプター開発環境をアップグレードするコンピューターのハードウェアを必要に応じてアップグレードし、WebSphere Business Integration Adapters 2.6.0.3 の要件を満たすようにします。

ハードウェア要件については、13 ページの『ハードウェアおよびソフトウェア要件』を参照してください。

2. 19 ページの『アダプター・フレームワークのインストール』の説明に従って、現在の Adapter Framework のインストール場所以外のディレクトリーに Adapter Framework をインストールします。Adapter Framework フィックスパック 2.6.0.3 を適用します。
3. 19 ページの『データ・ハンドラーのインストール』の説明に従って、開発するアダプターに必要となる各データ・ハンドラーをインストールします。
4. 利用可能な最新の Adapter Development Kit をインストールします。

WebSphere Business Information アダプターのアップグレード

このセクションでは、WebSphere Business Integration Adapters 製品セットの一部としてリリースされたアダプターのアップグレード方法を説明します。

注: アダプターを Adapter Framework バージョン 2.6 にマイグレーションするには、「*Migrating Adapters to Adapter Framework, Version 2.6*」を参照してください。Adapter Framework フィックスパック 2.6.0.3 を適用済みの場合、この文書で説明されるマイグレーション手順が適切です。

1. 開発環境で、以下の手順を実行します。
 - a. 統合ブローカー・システムを保存のためにバックアップします。
 - b. Connector Configurator で現在使用しているバージョンのアダプターの定義を開きます。

アダプターに関するすべての構成情報を記録します。

- c. アダプターをアップグレードするコンピューターのハードウェアを必要に応じてアップグレードし、WebSphere Business Integration Adapters 2.6.0.3 の要件を満たすようにします。

ハードウェア要件については、13 ページの『ハードウェアおよびソフトウェア要件』を参照してください。

- d. Adapter Framework 2.3.1 を実行していた場合、Visibroker Object Request Broker をアンインストールします。WebSphere Business Integration Adapters バージョン 2.4 から 2.6 では、IBM Java オブジェクト・リクエスト・ブローカーが VisiBroker オブジェクト・リクエスト・ブローカーに置き換わりました。
 - e. 前提条件ソフトウェアを必要なバージョンにアップグレードします。

ソフトウェア要件については、13 ページの『ハードウェアおよびソフトウェア要件』を参照してください。

- f. ご使用の統合ブローカーが、サポートされるメッセージ・ブローカー、または WebSphere Application Server である場合は、19 ページの『アダプター・フレームワークのインストール』の説明に従って、現在の Adapter Framework のインストール場所以外のディレクトリーに Adapter Framework をインストールします。

注: WebSphere InterChange Server を統合ブローカーとして使用する場合、および WebSphere Business Integration Adapter のインストール先を InterChange Server のインストール先と同じコンピューターにする場合は、別のディレクトリーにアダプター・フレームワークをインストールする必要があります。アダプター・フレームワークは WebSphere InterChange Server と一緒にインストールされません。

- g. 統合ブローカーが InterChange Server である場合は、現在インストールされているアダプターのディレクトリーを保存するため、そのディレクトリー名を変更します。
 - h. 20 ページの『アダプターのインストール』の説明に従って、アダプターの新しいバージョンをインストールします。
 - i. WebSphere Business Integration Adapters バージョン 2.6 のアダプターの定義を統合ブローカー環境にインポートします。
 - j. アップグレードするアダプターのガイドの『コネクターのインストールおよび構成 (Installing and configuring the connector)』という見出しの章を読み、構成する必要のある新規プロパティーを判断します。
 - k. ステップ 1b で記録した情報を基にして、ステップ 1i でインポートしたアダプター定義、およびステップ 1j で判明した新規プロパティーを構成します。
1. 19 ページの『データ・ハンドラーのインストール』の説明に従って、この環境に必要な各データ・ハンドラーをインストールします。

- m. この環境に必要な各アダプターのガイドの説明に従って、アダプター・ホスト・コンピューターへのアプリケーション・クライアントのインストールなど、アダプター固有のインストール・ステップを実行します。
 - n. レグレッション・テストを実行して、アップグレードしたアダプターが実装のビジネス要件を満たしていることを確認してください。
2. ステップ 1 (46 ページ) を実行して、ストレス・テスト環境のアダプターをアップグレードします。そして、レグレッション・テストを実行し、アップグレードしたアダプターが実装のパフォーマンス要件を満たしていることを確認してください。
 3. ステップ 1 (46 ページ) を実行して、実稼働環境のアダプターをアップグレードします。

カスタム・アダプターのアップグレード

ご使用の統合ブローカーが、サポートされるいずれかのメッセージ・ブローカー、または WebSphere Application Server である場合、WebSphere Business Integration Adapters 2.6 アダプター・フレームワークを使用するために、開発したアダプターをアップグレードするには、技術情報「*Migrating Custom Adapter Scripts to Run With WBIA 2.6.0*」を参照してください。この文書およびその他の技術情報の入手方法については、IBM お客様担当者にお問い合わせください。

第 7 章 インストーラーのトラブルシューティングのエラー・メッセージ

- 『エラーへの対処』

本章では、インストーラーのエラー・メッセージと、それらに対処する方法について説明します。

エラーへの対処

以下の表 7 で、インストーラーが生成するエラー・メッセージについて説明しています。中央の欄に、メッセージの説明があります。最後の欄では、エラー・メッセージへの対処方法を示します。

表 7. インストーラーのエラー・メッセージ

メッセージ	説明	可能な解決策
BIA01001: インストールを中止しました。 <i>Product_name</i> はこのオペレーティング・システムでサポートされていません。	サポートされないプラットフォームにサイレント・インストールを実行しようとした。このメッセージは、インストールの <i>Error.log</i> ファイルに書き込まれます。	サポートされるプラットフォームでインストーラーを実行します。
BIA01002: サポートされないプラットフォームに <i>Product_name</i> をインストールしようとした。「 <i>WebSphere Business Integration Adapters</i> のインストール」を参照してください。	サポートされないプラットフォームへ対話式インストールを実行しようとした。このメッセージは、インストーラー・パネルに表示されます。	サポートされるプラットフォームでインストーラーを実行します。
BIA01003: インストールを中止しました。ユーザー名がローカルの「Administrators」グループに属していないか、ユーザー・ログインが 20 文字を超えています。	このメッセージは、Windows マシン上のサイレント・インストール時に、インストールの <i>Error.log</i> ファイルに書き込まれます。	サイレント・インストールを実行する前に、管理者グループに属する、20 文字を超えないユーザー名を使用してログインしてください。
BIA01004: 次のいずれかの理由により、インストール・プログラムを続行できません。 1. ユーザー名がローカルの「Administrators」グループに属していません。 2. ユーザー・ログインが 20 文字を超えている。(IBM WebSphere MQ 5.3 と共に使用する場合は 20 文字の制限があります) 詳細については、「システム・インストール・ガイド (Windows 版)」を参照してください。	このメッセージは、対話式インストール時にインストーラー・パネルに表示されます。	対話式インストールを実行する前に、管理者グループに属する、20 文字を超えないユーザー名を使用してログインしてください。
BIA01005: ディレクトリー・パスにはスペースを含めることができません。	このメッセージは、対話式インストール時にエラー・ダイアログに表示されます。	ディレクトリー・パスからスペース文字を除去してください。

表7. インストーラーのエラー・メッセージ (続き)

メッセージ	説明	可能な解決策
BIA01006: 選択されたディレクトリーには、互換性のあるバージョンの Adapter Framework が含まれていません。	このメッセージは、アダプター/データ・ハンドラーの対話式インストール時にエラー・ダイアログに表示されます。アダプターおよびデータ・ハンドラーは、Adapter Framework がインストールされたロケーションにインストールする必要があります。	インストール済みの互換性のあるバージョンの Adapter Framework を指す完全修飾パスを入力してください。
BIA01007: インストールを中止しました。 <i>Product_name</i> のインストールの前に、IBM WebSphere Business Integration Data Handler for XML をインストールする必要があります。	このメッセージは、サイレント・インストール時に、インストールの Error.log ファイルに書き込まれます。XML データ・ハンドラーは、いくつかのアダプターで前提条件となっています。	アダプターをインストールする前に、データ・ハンドラーをインストールしてください。
BIA01008: <i>Product_name</i> のインストールの前に、IBM WebSphere Business Integration Data Handler for XML をインストールする必要があります。	このメッセージは、対話式インストール時にインストーラー・パネルに表示されます。XML データ・ハンドラーは、いくつかのアダプターで前提条件となっています。	アダプターをインストールする前に、データ・ハンドラーをインストールしてください。
BIA01009: InterChange Server 名は 80 文字を超えることはできません。	このメッセージは、対話式インストール時にエラー・ダイアログに表示されます (ICS サーバー名パネル)。	80 文字よりも短い ICS 名を入力してください。
BIA01010: InterChange Server 名にスペースを入れることはできません。有効な InterChange Server 名を入力してください。	このメッセージは、対話式インストール時にエラー・ダイアログに表示されます (ICS サーバー名パネル)。	スペース文字を含まない ICS 名を入力してください。
BIA01011: InterChange Server 名は数字で始まってはなりません。	このメッセージは、対話式インストール時にエラー・ダイアログに表示されます (ICS サーバー名パネル)。	英字で始まる ICS 名を使用してください。
BIA01012: InterChange Server 名は英字で始まってなければなりません。	このメッセージは、対話式インストール時にエラー・ダイアログに表示されます (ICS サーバー名パネル)。	英字で始まる ICS 名を使用してください。
BIA01013: InterChange Server 名には、英字および数字のみが使用できます。	このメッセージは、対話式インストール時にエラー・ダイアログに表示されます (ICS サーバー名パネル)。	0 から 9 の数字および英字のみを含む ICS 名を使用してください。
BIA01014: <i>Product_name</i> は正常にインストールされました。戻りコード: <i>installer_return_code</i>	インストール・ログ・ファイルに書き込まれます。	
BIA01015: <i>Product_name</i> のインストールは失敗しました。戻りコード: <i>installer_return_code</i>	インストール・ログ・ファイルに書き込まれます。	
BIA01016: <i>Product_name</i> は正常にアンインストールされました。戻りコード: <i>installer_return_code</i>	インストール・ログ・ファイルに書き込まれます。	
BIA01017: <i>Product_name</i> のアンインストールが失敗しました。戻りコード: <i>installer_return_code</i>	インストール・ログ・ファイルに書き込まれます。	

表7. インストーラーのエラー・メッセージ (続き)

メッセージ	説明	可能な解決策
BIA01018: このインストール・プログラムが正常に実行されるためには、Java ランタイム環境 1.4 以上が必要です。必要な JRE をインストールしてから、このインストール・プログラムを再度起動してください。	このメッセージは、対話式インストール時にエラー・ダイアログに表示されます。	Java 1.4 以上の JRE を使用してインストーラーを起動してください。 例: <jre 1.4>/bin/java -jar setup.jar
BIA01019: インストールを中止しました。このインストール・プログラムが正常に実行されるためには、Java ランタイム環境 1.4 以上が必要です。必要な JRE をインストールしてから、このインストール・プログラムを再度起動してください。	このメッセージは、サイレント・インストール時に、インストールの Error.log ファイルに書き込まれます。	Java 1.4 以上の JRE を使用してインストーラーを起動してください。 例: <jre 1.4>/bin/java -jar setup.jar -options settings.txt -silent
BIA01020: インストール・ロケーションに、Adapter Framework の互換バージョンがありません。	このメッセージは、サイレント・インストール時に、インストールの Error.log ファイルに書き込まれます。アダプターおよびデータ・ハンドラーは、互換性のあるバージョンの Adapter Framework がインストールされたロケーションにインストールする必要があります。	サイレント応答ファイルに、インストール済みの互換性のあるバージョンの Adapter Framework を指す完全修飾パスを入力してください。
BIA01021: インストール・ロケーションのパスにスペースを含めることはできません。	このメッセージは、サイレント・インストール時に、インストールの Error.log ファイルに書き込まれます。	サイレント応答ファイルのインストール・ロケーション・プロパティからスペース文字を除去してください。
BIA01022: インストールを中止しました。ユーザー名がローカルの「Administrators」グループに属していません。	このメッセージは、サイレント・インストール時に、インストールの Error.log ファイルに書き込まれます。	インストールを実行する前に、Windows で管理グループに属するユーザー ID を使用してログインしてください。
BIA01023: ユーザー名がローカルの「Administrators」グループに属していないため、インストールを続行できません。	このメッセージは、対話式インストール時にインストーラー・パネルに表示されます。	インストールを実行する前に、Windows で管理グループに属するユーザー ID を使用してログインしてください。
BIA01024: インストールを中止しました。Product_name のインストールの前に、IBM WebSphere Business Integration Adapter for WebSphere MQ をインストールする必要があります。	このメッセージは、サイレント・インストール時に、インストールの Error.log ファイルに書き込まれます。	このインストーラーを実行する前に Adapter for WebSphere MQ をインストールしてください。
BIA01025: Product_name のインストールの前に、IBM WebSphere Business Integration Adapter for WebSphere MQ をインストールする必要があります。	このメッセージは、対話式インストール時にインストーラー・パネルに表示されます。	このインストーラーを実行する前に Adapter for WebSphere MQ をインストールしてください。
BIA01026: インストールするコンポーネントが選択されていませんでした。「戻る」ボタンをクリックして製品フィーチャー・パネルに戻るか、「キャンセル」をクリックしてこのインストールを終了してください。	このメッセージは、対話式インストール時にインストーラー・パネルに表示されます。	フィーチャー・パネルでインストールするコンポーネントを選択してください。

表7. インストーラーのエラー・メッセージ (続き)

メッセージ	説明	可能な解決策
<p>BIA01027: インストールを中止しました。インストールするコンポーネントが選択されていませんでした。</p>	<p>このメッセージは、サイレント・インストール時に、インストールの <code>Error.log</code> ファイルに書き込まれません。</p>	<p>サイレント・インストールの応答ファイルで、少なくとも 1 つの製品コンポーネントをアクティブに設定してください。</p>
<p>BIA01028: ご使用のシステムには IBM WebSphere Business Integration Adapter Framework 2.6.0 より前のバージョンがインストールされています。(A previous version to IBM WebSphere Business Integration Adapter Framework 2.6.0 is installed on your system.) バージョン 2.6.0 をインストールする前に、既存の Adapter Framework バージョンをアンインストールすることをお勧めします。(It is recommended that you uninstall the existing Adapter Framework version before you install version 2.6.0.) 前のバージョンをアンインストールするには、「キャンセル」をクリックしてインストールを終了してください。続行するには、「次へ」をクリックしてください。アダプターをこの新しいバージョンにマイグレーションする方法については、「Migrating Adapters to Adapter Framework, Version 2.6.0」ガイドを参照してください。</p>	<p>このメッセージは、対話式インストール時にインストーラー・パネルに表示されます。</p>	
<p>BIA01029: ご使用のシステムには IBM WebSphere InterChange Server 4.2.2 がインストールされています。<i>Product_name</i> は別のシステムにインストールすることをお勧めします。(It is recommended that you install <i>Product_name</i> on a separate system.) 「キャンセル」をクリックしてインストールを終了するか、「次へ」をクリックして継続してください。アダプターをこの新しいバージョンにマイグレーションする方法については、「Migrating Adapters to Adapter Framework, Version 2.6.0」ガイドを参照してください。</p>	<p>このメッセージは、対話式インストール時にインストーラー・パネルに表示されます。</p>	

表7. インストーラーのエラー・メッセージ (続き)

メッセージ	説明	可能な解決策
BIA01030: <i>Product_name</i> は、ご使用のシステムにインストールされている IBM WebSphere InterChange Server のバージョンと互換性がありません。 <i>Product_name</i> は、IBM WebSphere InterChange Server 4.2.2 以上と互換性があります。IBM WebSphere InterChange Server 4.2.2 を使用している場合、 <i>Product_name</i> は別のシステムにインストールすることをお勧めします。(If using IBM WebSphere InterChange Server 4.2.2 then it is recommended that you install <i>Product_name</i> on a separate system.)	このメッセージは、対話式インストール時にインストーラー・パネルに表示されます。	
BIA01031: インストールを中止しました。 <i>Product_name</i> は、ご使用のシステムにインストールされている IBM WebSphere InterChange Server のバージョンと互換性がありません。 <i>Product_name</i> は、IBM WebSphere InterChange Server 4.2.2 以上と互換性があります。IBM WebSphere InterChange Server 4.2.2 を使用している場合、 <i>Product_name</i> は別のシステムにインストールすることをお勧めします。(If using IBM WebSphere InterChange Server 4.2.2 then it is recommended that you install <i>Product_name</i> on a separate system.)	このメッセージは、サイレント・インストール時に、インストールの <i>Error.log</i> ファイルに書き込まれます。	
BIA01032: IBM WebSphere Business Integration Adapter Framework をアンインストールする前に、IBM WebSphere Business Integration Adapters、Development Kit および Data Handlers をアンインストールする必要があります。このアンインストール・プログラムを継続する前に、これらのコンポーネントがシステムから除去されていることを確認してください。	このメッセージは、対話式アンインストール時にインストーラー・パネルに表示されます。	アダプター・フレームワークをアンインストールする前に、他のすべてアダプター・コンポーネントをアンインストールしてください。
BIA01033: このロケーションには IBM WebSphere Business Integration Adapter Framework 2.6.0 より前のバージョンがインストールされています。別のインストール・ロケーションを選択する必要があります。	このメッセージは、対話式アンインストール時にインストーラー・パネルに表示されます。	アダプター・フレームワークのインストール・ロケーションを変更してください。

表7. インストーラーのエラー・メッセージ (続き)

メッセージ	説明	可能な解決策
BIA01034: インストールを中止しました。このロケーションには IBM WebSphere Business Integration Adapter Framework 2.6.0 より前のバージョンがインストールされています。別のインストール・ロケーションを選択する必要があります。	このメッセージは、サイレント・インストール時に、インストールの Error.log ファイルに書き込まれます。	サイレント・インストールの応答ファイル内のアダプター・フレームワークのインストール・ロケーションを変更してください。
BIA01035: このロケーションには IBM WebSphere InterChange Server がインストールされています。別のインストール・ロケーションを選択する必要があります。	このメッセージは、対話式アンインストール時にインストーラー・パネルに表示されます。	アダプター・フレームワークのインストール・ロケーションを変更してください。
BIA01036: インストールを中止しました。このロケーションには IBM WebSphere InterChange Server がインストールされています。別のインストール・ロケーションを選択する必要があります。	このメッセージは、サイレント・インストール時に、インストールの Error.log ファイルに書き込まれます。	サイレント・インストールの応答ファイル内のアダプター・フレームワークのインストール・ロケーションを変更してください。
BIA01037: 入力されたディレクトリーは無効です。有効なディレクトリーを入力してください。	このメッセージは、対話式アンインストール時にインストーラー・パネルに表示されます。	既存の有効なディレクトリー・パスを入力してください。
BIA01038: インストールを中止しました。サイレント・インストールの応答ファイル内の IBM WebSphere MQ 5.3 Java ライブラリー・パス・オプションが無効です。	このメッセージは、サイレント・インストール時に、インストールの Error.log ファイルに書き込まれます。	サイレント・インストールの応答ファイル内に、MQ 5.3 Java ライブラリー・オプションの既存の有効なディレクトリー・パスを入力してください。
BIA01039: インストールを中止しました。サイレント・インストールの応答ファイル内の IBM WebSphere Studio Workbench ロケーション・オプションが無効です。	このメッセージは、サイレント・インストール時に、インストールの Error.log ファイルに書き込まれます。	サイレント・インストールの応答ファイル内に、Workbench オプションの既存の有効なディレクトリー・パスを入力してください。
BIA01040: インストールを中止しました。サイレント・インストールの応答ファイル内の IBM WebSphere Application Server Application Client ロケーション・オプションが無効です。	このメッセージは、サイレント・インストール時に、インストールの Error.log ファイルに書き込まれます。	サイレント・インストールの応答ファイル内に、WAS クライアント・オプションの既存の有効なディレクトリー・パスを入力してください。
BIA01041: インストールを中止しました。サイレント・インストールの応答ファイル内の IBM Tivoli Monitoring for Transaction Performance Management Agent ロケーション・オプションが無効です。	このメッセージは、サイレント・インストール時に、インストールの Error.log ファイルに書き込まれます。	サイレント・インストールの応答ファイル内に、ITMTP エージェント・オプションの既存の有効なディレクトリー・パスを入力してください。

表7. インストーラーのエラー・メッセージ (続き)

メッセージ	説明	可能な解決策
BIA01042: IBM WebSphere Adapter Framework 2.6.0 が、入力された場所がありません。Adapter Framework 2.6.0 をインストールしてからこの Adapter Framework 2.6.0.3 (フィックスパック 3) をインストールする必要があります。有効なディレクトリーを選択してください。	Adapter Framework 2.6.0.3 は、Adapter Framework 2.6.0 (先にインストールする必要がある) と同じディレクトリーに適用する必要があります。	Adapter Framework 2.6 がインストールされたディレクトリーにフィックスパックを適用するか、先に Adapter Framework 2.6 をインストールしてください。
BIA01045: このマシンには Adapter Framework 2.6 がインストールされています。Adapter Framework のこのバージョンのインストールを継続すると、Adapter Framework 2.6 は機能しなくなります。「はい (Yes)」をクリックしてインストールを継続します。	新規バージョンの Adapter Framework は、古いバージョンの一部のファイルを上書きします。	古いバージョンのファイルをバックアップすることをお勧めします。
BIA01046: 指定された構成ファイル・パスは無効です。使用法: reg_<adapter_name>.bat <absolute path to config file> <dependent services>	指定した構成ファイルがファイル・システムに存在しません。	有効な構成ファイルを指定してください。
BIA01047: 使用法: reg_<adapter_name>.bat <path to config file> <optional dependent service>	.bat ファイル名の後に 1 つまたは 2 つのパラメーターを入力する必要があります。最初のパラメーターは構成ファイルであり、必須です。2 番目のオプションのパラメーターは、前提条件の Windows サービスです。	最初のパラメーターである構成ファイルの名前を指定してください。
BIA01048: ログイン名がローカルの「Administrators」グループに属していません。Windows サービス登録の権限がありません。	Windows 管理者グループのメンバーとしてログインしなかったため、Windows サービスを登録する権限を持っていません。	管理者としてログインしてください。
BIA01049: Windows サービスの登録が失敗しました。	Windows サービスの登録が失敗しました。	Adapter Framework フィックスパック 2.6.0.3 は正しく適用されていますか? Windows サービスはすでに登録されていますか?
BIA01050: Windows サービスの登録は正常終了しました。	Windows サービスは正常に登録されました。	
BIA01044: 「Windows サービスを作成する (IBM WebSphere InterChange Server)」を選択した場合、この「IBM WebSphere InterChange Server 名」フィールドをブランクにすることはできません。異なるブローカーを使用していて、アダプターの Windows サービスを登録する場合、このインストール・パネルの注を参照してください。	InterChange Server 用の Windows サービスを登録する場合、インストール時に InterChange Server 名を指定する必要があります。その他のブローカー用の Windows サービスを登録したい場合は、インストール後に登録することができます。	InterChange Server 名を指定するか、またはチェック・ボックスを選択解除します。

索引

日本語、数字、英字、特殊文字の順に配列されています。なお、濁音と半濁音は清音と同等に扱われています。

[ア行]

- アダプター
 - アダプター開発環境 4, 12
 - インストール 20
 - 定義された 4
 - 分散アダプター環境 4, 8
 - リモート・アダプター環境 4
 - ローカル・アダプター環境 4
- アダプター 環境
 - リモート・アダプター環境 10
 - ローカル・アダプター環境 7
- アダプター開発環境 4
- アダプター開発環境のアップグレード 45
- アダプター環境 4
- アダプターのインストール 20
- アダプター・フレームワーク 33
 - インストール 19
- アダプター・フレームワーク
 - 前提条件 13
 - 定義された 4
 - バージョン 2.6 の変更点 6
- アダプター・フレームワークのインストール 19
- アンインストール 31, 33
- インストーラーの手順 17
- インストール
 - HTTP/S トランスポート 38
 - Remote Agent コンポーネント 38
- インストール CD 15
- インストール CD の挿入 15
- インストール応答ファイル 18
- インストール済みディレクトリー、ファイル、および環境変数 25
- インストーラのロードマップ 1
- エラー・メッセージ 49
- オペレーティング・システム要件
 - コネクタ・エージェントの分散 37

[カ行]

- 開始
 - Remote Agent コンポーネント 43
- カスタム・アダプターのアップグレード 47

- 環境変数 27
- グラフィカル・インストーラーの使用 17
- コネクタ・エージェントの分散 37
 - オペレーティング・システム要件 37

[サ行]

- サイレント・インストール 18
- サイレント・インストールの実行 18
- スポーク・サイト
 - 必要なソフトウェア 38
- セキュリティ 44
- 前提条件
 - アダプター・フレームワーク 13
 - ICS ソフトウェア 45

[タ行]

- データ・ハンドラー
 - インストール 19
- データ・ハンドラーのインストール 19
- データ・ハンドラー要件 14
- 統合ブローカー 5
- トラブルシューティング 49

[ハ行]

- ハードウェア要件 13
- パスポート・アドバンテージ 16
- ハブ・サイト
 - 必要なソフトウェア 37
- 分散アダプター環境 4, 8

[ヤ行]

- 要件
 - ハードウェア 13
 - XML データ・ハンドラー 14
- 用語 4

[ラ行]

- リモート・アダプター環境 4, 10
- ローカル・アダプター環境 4, 7

A

- Adapter Development Kit (参照：ADK)

- ADK
 - 定義された 5

B

- BiDi 5

C

- Common Desktop Environment 17

H

- HTTP/HTTPS 40
- HTTP/S トランスポート
 - インストール 38
 - 概要 37

I

- ICS
 - コネクタ・エージェントの分散 37
 - ソフトウェア前提条件 45

M

- MQ 相互通信
 - インストール 38

R

- Remote Agent
 - コンポーネント
 - 開始 43
 - スポーク・サイト
 - インストール 43
 - テクノロジー
 - インストール 38
 - インストールの計画 38
- Remote Agent の構成 39

U

- UNIX および Linux システムでのアダプターのサイレント・インストール 23
- UNIX 環境でのインストーラー 17

W

WebSphere Integration Message Broker バ
ージョン 2.1 5

WebSphere ビジネス・インテグレーション・システム 5

Windows 環境でのインストーラー 17

Windows システムでのアダプターのサイ
レント・インストール 22

X

X エミュレーション 13, 18

XML データ・ハンドラー 14

特記事項

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものです。

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒106-0032
東京都港区六本木 3-2-31
IBM World Trade Asia Corporation
Licensing

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。

IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Corporation
577 Airport Blvd., Suite 800
Burlingame, CA 94010
U.S.A.

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができますが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性があります。その測定値が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確認できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者をお願いします。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があります、単に目標を示しているものです。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

著作権使用許諾:

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほめかしたり、保証することはできません。

この情報をソフトコピーでご覧になっている場合は、写真やカラーの図表は表示されない場合があります。

プログラミング・インターフェース情報

プログラミング・インターフェース情報は、プログラムを使用してアプリケーション・ソフトウェアを作成する際に役立ちます。

一般使用プログラミング・インターフェースにより、お客様はこのプログラム・ツール・サービスを含むアプリケーション・ソフトウェアを書くことができます。

ただし、この情報には、診断、修正、および調整情報が含まれている場合があります。診断、修正、調整情報は、お客様のアプリケーション・ソフトウェアのデバッグ支援のために提供されています。

警告: 診断、修正、調整情報は、変更される場合がありますので、プログラミング・インターフェースとしては使用しないでください。

商標

以下は、IBM Corporation の商標です。

IBM
IBM ロゴ
AIX
AIX 5L
CICS
CrossWorlds
DB2
DB2 Universal Database
HelpNow
i5/OS
IMS
Informix
iSeries
Lotus
Lotus Domino
Lotus Notes
MQIntegrator
MQSeries
MVS
OS/400
Passport Advantage
pSeries
Redbooks
SupportPac
WebSphere
z/OS

Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは、Sun Microsystems, Inc. の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

Microsoft、Windows、Windows NT および Windows ロゴは、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

Intel、Intel (ロゴ)、Intel Inside、Intel Inside (ロゴ)、Pentium、Intel Centrino、Intel Centrino (ロゴ)、Celeron、Intel Xeon、Intel SpeedStep および Itanium は、Intel Corporation の米国およびその他の国における商標です。

UNIX は、The Open Group の米国およびその他の国における登録商標です。

Linux は、Linus Torvalds の米国およびその他の国における商標です。

他の会社名、製品名およびサービス名等はそれぞれ各社の商標です。

この製品には、Eclipse Project (<http://www.eclipse.org/>) により開発されたソフトウェアが含まれています。



WebSphere Business Integration Adapters バージョン 6.0



WebSphere Business Integration Adapter Framework V2.6.0



Printed in Japan